

浄土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎冊一圓）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別扱承認
昭和三十三年十二月二十五日印刷 昭和三十三年
日発行
日発行

第二十四卷



正月号

浄土寺院必読の書増版

仏教大学教授坪井俊映著

浄土三部経概説全

A5上質紙・特製本
三段組・六三五頁
定価一、二〇〇円

初版たちまち売切れ！

仏書のベストセラーはこれだ！

浄土三部経を最も判り易く解

説した本書を ぜひ

毎日新聞評

この経典は浄土
門の拠所となるもの。浄土
宗義を明らかにする目的で
綿密に注釈、解説が行われ
ている。

常盤大定監修

仏典説話全集全十二巻

B6各四三〇頁余 総ルビ
各巻 四〇〇円
三、六〇〇円
(送料共)

御希望に依り第三巻及第七巻増刷して全十二巻を揃えましたからお
申込下さい。なお分冊売りはしません。

高橋良和著

影絵物語 法然さま 価九〇円
十一六円

法然上人の御一代記を美しい
影絵によって物語る二色刷の
影絵絵本

話 児童 幼

日本図書館協会選定図書
高橋良和・小関尚之・
山田巖雄他著

星の花

価一八〇円
二四円
すぐその儘お話に使えるお話
の台本

浄土正月号 目次

表紙・扉絵……………結城天童

新春随想 犬君の功德の数々……………竹中信常……………(6)

誠と愛の世界……………真野正順……………(11)

随筆 縁なき衆生……………塩田良平……………(2)
菊と蓮(六代目の片影)……………池田立基……………(12)

御来迎の雲……………吉野翠幹……………(15)

道德教育のゆくえ…………………………(26)

新「修善寺物語」…………………………(22)

童話よごれた荷札……………高橋良和……………(24)

地球の外の世界……………原田三夫……………(18)

ドイツ復興の原動力……………松本徳明……………(30)

信仰相談……………佐藤賢順……………(28)

歌壇選者の言葉……………岩野喜久代……………(10)

ふしぎな言葉……………(5) 坐像と立像……………(23)

サル社会のおきて……………(28) 扉の御法語……………(20)

白業で泣いた正月……………(8) 会員のたより……………(40)

聖典一切衆と俱に……………佐藤密雄……………(34)

編集後記

浄土

正月号

われ浄土宗をたつる心は、凡夫
の報土にむまることを、しめさん
がためなり。

法然上人御法語



縁なき衆生

塩田良平

私の家には仏壇がない。書斎だけが坐敷で他は全部

洋間なので、安置するところがないといえぱそれまでだが、そうではなくて敗戦後まもなく売却してしまつたのである。ある学校の再建に奔走して、資金につまり、売るものが無くて仏壇を売つたと女房が釈明した。御先祖の位牌と過去帳は御本家に御返ししたといふのである。終戦後としてはまアりっぱな仏壇の方だったので高く売れたのだろう。だから今もって仏壇はない。かわりに、広隆寺の弥勒菩薩の写真が隅にかけてある。これは三十何年か前、失恋のあげく京坂をさまよつた時、この仏の慈顔に引きつけられて、以後魂のまもりにした仏様である。（但し、このことは女房にはいってない）この写真が今では装飾兼信仰の対象である。

私はクリスチャンでもないし、立正交成会でもない。創価学会ではさらさらない。そういう何々を信じ

ると、はつきりした態度をとることが嫌いである。

私の家は浄土で菩提寺は伝通院だから、私が死ねば女房は習慣に従つて多分浄土宗の式をするだろう。私自身は何宗だときめてはいないが、お宅の宗旨は何だときかれれば浄土と答えるだろう。私と仏教との関係といえぱこのくらいのものである。その他一二、仏教大学に出ているが、これは教義を教えに行くのではなく文学を多弁りに行くのだから仏教そのものとは関係ない。又、それぞれの宗門では善知識であるに違いない、えらい先生方とつき合ひはするが、相手の方で私を問題にしないから、お宗旨の話などはついぞしたことがなく気楽である。

では、仏壇を売るとばし位牌を本家に預つて貰い、伝通院のお参りも怠りがちな私如き者は、仏法に対して怪しからん考えを持っているかという、どうもそうではないらしい。



早い話が仏教的行事は案外素直にやっているのである。例えばお彼岸にお墓参りは失敬してもお彼岸の供物はつくる。別に差上げる仏壇はないから、食べて楽しむだけだが、お盆のお精霊祭でも何でも、とにかく仏様にあげることが起ると抜目なくやるのである。クリスマスのお料理は特別につくらなくても、誰かのお命日だということとちゃんとお供物をつくるというのは、やはり仏教のおかげだろう。食物のことだけで申しわけないが、歳暮にきく除夜の鐘などは、本来の意義は忘れても、われわれの生活にはなくてはならぬ一年一度の説教として、私はしんみに聞くのである。実際私共が無意識にやっていることでも、案外これが仏教儀式からきたものだと言わなければならない。

七八年前何新聞か覚えていないが、共産党の徳田球一が子分たちと自宅で祝盃をあげている写真を見たことがある。ところが面白いことにはその背後に神棚が祭ってあった。大神宮様が金光様か知る由もないが、共産党といえは主義の上からも偶像否定であり、宗教排斥のはずである。それが人もあるうに徳球だから尙面白い。恐らく彼自身は、意識の中でこそ神仏は抹殺していたのだろうが、生活のしきたりというものは、

意識界を超越するものと見えて、徳球の生活にも血肉となつて入りこんでいたのだから面白い。

私共が何かやりそこなうと「南無三」という。「金輪際口を利いてやるものか」という。誰も南無三宝や金輪際の語源をふまえて云っているわけではない。仏語が血肉となつて日常用語化しているだけである。私はよく結婚の媒酌を頼まれることがある。「この度縁があつて何々君と何々嬢は」と平気でいうが、あれも本当は仏説の因縁から来た深い意味をもつのだろう。しかし私がそういったとて新郎新婦は別に仏様に感謝したような顔付はしない。言葉が常識化してしまっているからである。それほど仏教が生活と結びついているのである。

要するに、私のように仏壇を売払った外道の類と雖も、精神的な、無形の仏壇は、わが家の生活の中に充滿しているのである。仏様の慈悲は感じなくても、慈悲の方がいろいろな形をとって現われてくるのである。

このように、日常生活に緊密に結びついている仏教を、根源の相にもどして、慈悲の本体をわれわれの意識の上にはっきり植えつけさせてくれるのが坊さん



で、それは私などの及ぶところではないから、どうにも書きようがない。

世の中には、私のように自分の宗旨は何宗だと知っていても、なぜ浄土宗に帰依するかをはっきり分別している者は、あんまり多くはなからう。それでいいのだと思う。生死の大事の究明は、一朝事ある時に旦那寺のお住持さんに駆けこめばいいので、人間はあまり悟らない方がいい。

私はある席上で、生前の望みとして、私がもし死んだら椎尾弁匡大僧正に引導を渡して貰いたい、といったら、聞いていた人々がクスリと笑った。江戸っ子はおべんちゃらを使わないから、まさかおべんちゃらを笑ったわけではなからう。椎尾さんは高齢な、私は大僧正から見れば二十幾つかも下の若輩だから、普通の寿命計算で行けば矛盾しているから笑われたのだらう。しかし、人間の願というものは純一なもので、願それ自身が一つの命になるものである。その時椎尾さんが生きていようが居まいが、今の私の知ったことではない。死んだら仏様のところへ行きたい、と願うことには、誰も笑わない。(但し私の場合に行けるかどうかは疑問だが)同じことだ。仮今年の順で椎尾さん

の方が先へ亡くなられても、あの僧正なら私の死際に引導を渡してくれるに違いないと思ったから言ったのである。

聞いてくすりと笑ったのは、大部分が寺院に育っている子弟だから一寸憤慨した。仏様に仕えていながら一体命というものをどう心得えているかと反問したくなった。(もっとも理窟から行けば私が負けるだろうが。)

死ぬの生きるのと椎尾博士には失礼至極な話はやめて、最初にかいた弥勒菩薩の写真だが、私は別に礼拝しているわけではない。ただ気が屈するとその前に凝然と佇むだけである。気がすつとする。それは信仰からくるのか、あの仏像の芸術的雰囲気によるのか、どちらか知らない。とにかく気が晴れるのである。

これは又聞きだから真偽は保証しかねるが、谷崎潤一郎氏の所へ骨董屋が掘出物とか何とかいって仏像を持ちこむと、氏はそれが何であろうと、一度礼拝してからその像をとり上げるそうである。親代とつたわっている信仰心の無意識な現われである。

ところが志賀直哉氏の場合には、最初から凝視するそうである。まづ仏像のもつ芸術的価値を評価する鑑



識者としての立場がさきへ出る、という。これは東洋的な見方と西洋的な見方にも區別できるかも知れないが、それぞれ立場を異にしても、いい仏像なら、最後に来るものは、理屈をのりこえた感銘であることにはかわりない。

それが信仰の極致からくるのか、美の極致からくるのか、私のような素人にはわからない。ただ思うことは、この時の感銘が人間のいのちだというだけである。仏法に縁なき衆生の私は、せめて、このいのちを通じて、仏にふれようとする外には手がないようである。

ふしぎな言葉

いずれも困った話、公園を汚すとか、便所がくさいとか、列車の中がごみ箱みたいたとかいう話のでた時に、「どうも日本人は……」と前置きする言葉を聞きませんか。私はよくこの前置きを聞かされるのですが、その度ごとに嫌な気分がします。不快なというより不思議な感じがします。この人もやはり日本人なのだろうに、と相手の顔を眺めます。

卑屈とか、自己嫌悪とか、又はそれらの潜在意識とかむずかしいことではなしに、口癖のようにいう人があります。諸外国の習慣や美德をとり入れるに忙しかった時分に、「外国ではコレコレである」という言葉が流行った。恐らくその時代の名残りでありましょう、更に又、どんなことでも頭から侮べつし、非難する一群のインテリがあつたが、そのくせの延長かも知れません。

先輩同僚を、同胞を愚劣視することを以て自ら独り清しとする人に出逢うと、その人自身を疑うというよりは、私たちまで淋しい氣がします。Donald・キーンという米人が、「列車に乗ると、よく日本人の人から——日本の汽車は汚いでしょう——日本の汽車はおそいでしよう——等と質問される。あるいはまた、ざつくばらんに日本を批評して下さい。悪口でもかまいません。叱って下さい等といわれるとき、私は実に困る」といっています。誠にごもっともだと思います。

孔子は「我れ日に我が身を三省す」といつているが、我々の小さい行動の一つ一つに、どのような社会的反響があるかと自覚して行動しなければということを考えてみたい。

これは単に国柄の相異といったことでは済まされない問題を含んでいるようだ。心新らたな、新春に当って苦言を提しておく。



新春
随想

犬^{わんくん}君の功德の数々

竹 中 信 常

犬は昔からの友達

ソ連の人工衛星第二号にのって、人間より一步お先に、宇宙旅行としゃれこんだのは、ライカという牝犬君。

渋谷の玉電駅前に、今では、アベックのこの上もないよい目じるしとなっているのは、「忠犬ハチ公」の銅像。上野の森を背にして花のお江戸を睨んで立つ、西郷さんの足元に、これまた、一人前の顔をして、「今の人間共はなっちよらん」といいたげにしているのは、さて、何という名かとに角犬。そしてまた、旅好きな人なら、必らず行く先々の名所古蹟の中に、犬にまつわる伝説や旧蹟の意外に多いのに気づくことであろう。

犬が人間の友達となり、一緒に苦楽をと

もにするようになったのは随分昔のことらしい。学のあるところを御披露すると、犬が人間に家畜として飼われるようになったのは石器時代のことである。そしてまた、現在、地球上に存在する人類の中で一番原始的であるといわれる、セイロン島のヴェツダ族でも、ちゃんと犬を飼っている。しかも、ヴェツダ族の娘は、結婚の時に親から一匹の犬をもらって、これを唯一の嫁入仕度としてかたづくのだから、犬たるもの、結婚の引出物として、なければならぬ「貴重な存在」といわなければなるまい。

犬年の正月にちなんで、少し、犬君のためにその功績を弁ずることにしよう。

犬からもらった寿命

功績の第一番目は、人間の寿命の中の一

部分は、犬がくれたものだということである。この頃は医学が進歩して、平均寿命がのびたと喜んでゐるが、あにはからんや、人間の寿命のうち「二十年」は犬がわけて下れたのである。もつとも、これは、日本のはなしではないが、しばらく辛ばうしていただきたい。それは近頃東西陣営の中ばさみの形にある、ルーマニアでの話である。昔、神様が世界をつくり、いろいろの動物を生み出された時のことである。生き物を全部召し集めて、それぞれの寿命をおきめになった。まづ第一に、人間をお呼び出しになり「お前だけは二本足で立つことをゆるす。また、地上の凡ゆる生きものもお前の所有にしてやる。その代り、寿命は三十年だぞ」とおおせられた。いくらえはりくさってみても、たった三十年ではつま

命をかけた忠犬

犬は、人間に寿命をわけて下れたただけでなく、人間のいのちをも随分多くたすけてくれている。スイスでは、薬箱を首につけた犬が、山の遭難者をたすけるために、雪の中をかけまわっているということである。

中国の昔、晋の国に華隆という獵師がいた。彼は的尾というすばらしい犬を持っていた。ある日、山に狩に出かけて、昼になったので、山のくぼの日だまりで弁当を使った。疲れたのでついウトウトといねむりをした。的尾はその間に、少しはなれた谷川に、水をのみに行った。その留守に大蛇が出て来て、華隆の体をぐるぐる巻きにして、今にも呑み込もうとした。丁度その時、的尾が戻って来て、猛然と大蛇の首にかみついて、引きずりはなしてこれを殺した。ところが、華隆は氣を失ってたおれていたので、的尾はしばらくはうろうろしていたが、やがて、決心したかのように、一散に山を下って、里に帰り、家人の裾をく

らねえなあと不平を言ったが、神様のきめたことゆえ引きさがるほかはない。次に呼ばれたのはロバ。「お前は荷物を背負ったリ、車をひいたり、人を乗せたりせねばならぬ。また鞭でひっぱたかれたり、まづいものもたべなければならぬぞ。しかし、寿命だけは五十年やるからな」それをきいてロバは「いくら五十年の寿命があっても、そんなに苦しいんでは大変、人間と同じ三十年で結構です」と申し上げた。わきでそれをきいていた人間は、早速口をはさんだ。「ロバがいやだというものを無理にやらななくてもいいでしょう。どうですロバのいない分をこちらへまわして下さいませんか」神様はこれを許るされた。

さて、その次には犬が呼ばれた。「お前は、お前の主人である人間の家と財産を守り、夜もねずに番をせねばならぬ。その代り、時にはうまいものもたべさしてやるぞ、それは人間がたべ残した硬い骨ぢや。

お前の寿命は四十年」これをきいて犬は神様に申し上げた。「夜もねないで、人間のために働いて、そのごほうびが骨とはなさ

けないことでございます。それぢや四十年は永すぎますから、半分でかんべして下さい」こういういい終らぬところへ、また人間がしゃしゃり出て「では、犬のいらぬ分は私の方へ」神様はニガ笑いをされたが、これも許るされた。最後に猿が呼び出された。「お前は、姿だけは人間に似ているが、少し悩みそもたりないし、顔とお尻が赤いので、人間の子供達の遊び相手になってやれ。ながく子供達の友達でいられるように、特に六十年の寿命をやるぞ」猿は、考えた。いくら長生きしても、人間にはなれっこないのだし、子供達にまで馬鹿にされたのではたまらない。「いえ、もう、半分の三十年で充分でございます」。この三十年もまた人間が貰ってしまった。合計、寿命が百年になったと、人間は大喜びだったが、神様はそれを御覧になって、何故かわびしそうな顔をしておいでになったとのことである。

ほかのものの寿命まで欲張った人間、はたして幸福だったろうか。

わえて連れて行こうとする。始めのうちは、家人も怪しんでいたが、的尾の様子は余りに物狂わしく、しかも口のまわりには血さえしたたっているの、これは何か大事が起きたのかとさとり、大急ぎで山に入り、的尾の案内で、無事に華隆を助け帰った。

よその国のことばかりでは相済まぬので、わが国にも、立派に主人をたすけた犬のいることを少し御披露しよう。

今昔物語というものの本の、第二十九巻に、陸奥の国の狩人の話が出ている。彼は何匹かの犬を飼っていたが、その中でも、一番古くからいる賢い赤犬を可愛がっていた。山に入って夜になったので、大木のうろに入って、犬共と一緒に眠りに入った。ところが、ふと赤犬がめをさますと、急に吠え出した。しまいには狩人におどろかしろうとさえするので、刀をぬいておどかしだが、ますます狂うように吠えかかる。せまいうろの中では、かみつかれては大変と、狩人はそとへ飛び出した。その瞬間、赤犬は、狩人がねていた丁度真上の辺りにとび

上がると、どつとばかりに、何か重いものをくわえて落ちて来た。狩人がおどろいて、灯をつけてみると、何と、それは二丈に余る大蛇だったのである。狩人は、赤犬をこの上ない財宝のように思つて大切にした。

この話が、少しく脚色されたのが、和漢三才図会に出ている「犬頭社」「犬尾社」の話である。三河の国上和田の領主宇津左衛門五郎忠茂は一匹の白犬を愛育していた。天正三年のある日のこと、この白犬を連れて山に狩に行った。一本の大木のもとに腰をおろして、ひとやすみしていると、妙に眠気がさして来て、ついうとうとする。白犬は一生けんめいに、忠茂のはかまのすそを咬えて引く。そのときは、ふっとさめるが、またすぐに、ぐいぐいと引きいれられるように、ねむりこける。白犬は、段々ものぐるわしく、忠茂にとびかかって、いまにも咬みつこうとさえする。余りのことに、忠茂は怒つて、腰の大刀で白犬の頭をはねると、頭はそのまま飛んで、樹上に毒気を吐き乍ら、機をねらっていた大蛇の頭に、ガブリとばかりかみついたのである。これを

白菜で泣いた正月

昭和二十一年の新春である。当時北朝鮮でソ連軍に抑留されていた頃、野菜の不足は甚だしいものであった。毎日の食糧にも事欠く位で野菜等はぜい沢品のようなであった。

そのため隊のほとんど全員が敗血症になつてしまった。歯ぐきから血がでる。身体がむくんで、はん点ができる。夕方からは夜盲症のために悲喜劇の続出というわけであつた。

まだ草のある内はよかったが、これも枯れてしまつて、松葉を粉にして喰べた。というより強制的にのませた。ある時、一袋の大豆が手に入つたので、半分を納豆にし、半分をモヤシにした。このモヤシが一番効果をあげて、目に見えて夜盲が減つたが、これもすぐなくなつてしまった。

こんな苦勞をしている時、偶然白菜を買うことができた。生のまま株のままかじりついて喰べあつたものである。しかし、白菜で泣いたのはもう少し別の理由があつ

みた忠茂、いままでの眠気も一べんに消し
とんで、あたら忠犬を我手にかけてことに、
涙を流して悔んだが、いまは既におそし。
泣く泣く、白犬の頭と尾とを切りとって、
これを別々の地に埋めて祠を立ててほうむ
った。頭を埋めた「犬頭社」は上和田森崎
に、尾をうめた「犬尾社」は下和田に現在
もなおあるとのことである。

犬は死んでも人のため

むかし、三河の国の代官が、本妻と妾と
に、それぞれ養蚕をさせた。ところが、本
妻の方の蚕はどうしてもうまく育たずに、
みんな死んでしまった。家も貧しくなり、
代官もよりつかず、家人も一人へり二人へ
りして、本妻一人が荒れた屋敷の中に残こ
されてしまった。或日のこと、ふとみると、
蚕室の床の上に、桑の葉にとまってたった
一匹だけ蚕がいて、桑をたべている。本妻
は、これを拾って棚において、桑の葉を沢
山やって、大切にしていた。ところが、家
に前から飼われて、みんなが出て行ってし
まっても、たった一匹だけ残って本妻をな

ぐさめてくれていた白犬が、この蚕をたべ
てしまった。本妻は、たった一匹残った蚕
までが、自分には飼いきれぬかと、犬を抱
いて泣いていた。

本妻に抱かれて、ともに泣いていた白犬
が、ふとくしゃみをした。そうすると、お
どろいたことには、犬の鼻の穴から、二本
の白糸が出た。それを引いてみると、切れ
もせずに、あとからあとから出て来る。金
高にして四、五千兩の糸が出て来、巻き終
ったところで犬は死んでしまった。これは
仏天が犬に化して、助けてくれたのだと思
って、屋敷のうしろの桑の木の根本に、ね
んごろに埋めた。夫の代官が所用で、宅の
前を通って、ふとのぞいてみると、本妻が
一人で、美事な糸を巻きつけているので、
おどろいてわけをたづね、以後は、他に行
かず本妻のところにとどまって、むつまじ
く暮した。白犬を埋めた桑の木は美事に育
ち、その葉をたべた蚕は、無類の糸を吐く
ようになった。当時「犬頭」と呼ばれ、三
国一の糸として、天皇の御服を織るに用い
られたとも伝えられている。

た。つまりアルコールであった。

八方に手をつくして、闇のアルコールが
手に入った。これは自動車用の燃料なの
で、当然ガソリンも可成り入っていた。ま
ずこれに火をつける。すると初めは色のつ
いた焰であつたのが、一定時間たつと無色
の焰にかわる。ガソリンが燃えつくしてア
ルコールが燃え始めた証である。しばらく
くして焰を消して、少量づつ水に割って飲
むわけである。

ガソリンが燃えつくしたとはいえ、ガソ
リンの臭気がなくなったわけではない。臭
くて飲めた代物ではないものを、目をつぶ
って少しのどに流し込む。アルコールだか
らすぐ酔いが廻る。酔った勢いで臭いのを
飲んでしまう。その時一人の男が立ち上っ
て、白菜を抱いて踊り始める。他の一人が
また立って、白菜を奪いとり、一枚の葉を
口に押し込みながら踊りだす。しまいには
白菜を両手で持って、何かがなりながら泣
き出す者まである始末になった。翌日目が
覚めて目が見えるかどうか真剣に心配した
ことを今でも忘れない。



歌壇

選者のことば

岩野喜久代

浄土の歌壇は昭和十七年、与謝野晶子先生がお亡くなりになるまで、ずっと先生が選をして居られました。このたび、弟子のわたくしに選者になるようにとのお話で、師との旧縁を思い、仏縁に結ばれる忝さに、喜んでお手伝いさせて頂くことになりました。

○

昔は、和歌と云われまして我国二千年来の伝統をもつ三十一字の定型詩、近来はこれを短歌という名で呼んで居ります。明治中葉、与謝野寛、晶子両先生が、伝統和歌が形骸し、概念化して、詩の生命を失ったのを嘆いて、和歌革新運動を興し、和歌と云うことばをさけて、短詩と称した事から、二千年の伝統に新しい詩の息吹きが吹きこまれました。あくまで、伝統に立脚すると共に、世界の詩に比べても恥じぬ文学的価値をもったものに

高めようとする努力は、其後幾多の歌人が為して来たことです。

○

短歌とは、三十一の文字をもって、自分が体験した詩的感動の炎を捉えて、音楽的に表現するものだ、と申せましょう。自分が実感し、体験しうるものでなければ、ウソになります。又、詩的感動でなければ、詩にはなりません。

詩的感動とは何か、人間の感情の中には、常識的な日常生活で誰でも共通に思い、感じ、慣れっこになった感情以上の、自分だけに、いきいきと感動の波をたかぶらせ、或はハッと驚かせ、或はふかく思い沈ませる特殊な感情があります。うれしい、悲しい、苦しい、楽しい、驚いた、など、平生の自分をゆり動かして、じっとさせておかない感動があ

ります。優れた詩人は敏感に、自分や社会にふれて、自己の感動の炎を燃え上らせますが、平凡な私どもでも、波のうねりのように、時折り感動が高まります。その波の山を、すかさず捉えて下さい。

○

そして、その相を彫刻するには、自分の発明し、発見した言葉、それも洗練され、ときすまされた一字のむだもない言葉であらわして下さい。人の言葉をマネしたり、古い時代の人間の感覚や用語を模倣しないで下さい。定型詩の用語としては文語がもっともふさわしいと思いますから、短歌表現には口語はとりません。

近来、短歌の定型を破って、三十字、三十字、四十字、勝手次第に字余り字足らずを作り、それが新しいように思う人々もありま

誠と愛の世界

真野正順

潮のわき、雲の如くおおいにかかっている恐るべき社会悪の傾動については、確固たる良心のレジスタンスがなければならぬ。かかる抵抗の本質を構成するものは、誠と愛である。これによって一つの行動力となり、「正直ものは馬鹿をみる」大勢に拮抗せねばならぬ。

しかし、このたたかいでは、絶えず苦悩の中にあり、絶えず暗闇にとざされる。人をして深く嘆息せしめる。しばしば絶望せしめる。その如く社会における悪の力は強いのである。

これに対し、同志結合して、この社会に動く一つの誠実と愛とが支配する清新なる小社会を形成するの、一つの道である。絶望につかれた人は、それによって信実への通路の厳存するのを見るだろう。そしてわが内心に萎えたる倫理感を覚醒せしめ、復活せしめなければならぬ。サンガとは、かくの如きものでなければならぬ。それが理想的に結集したものが仏国土——浄土である。浄土は、現世における良心の蘇生する地であると共に、絶えざる倫理的戦闘の根きよである。(文学博士)

すが、私はそれに不賛成です。飽くまで、伝統の三十一字の中で苦勞して頂きたく思います。

「芥子粒に須弥山を盛る」という仏語もあり、「五言長城」という中国の詩についての言葉もある位で、短い言葉が万里の長城ほどの意味、余韻、風格を現すよう工夫すべきだと思えます。言葉を少しも選ばず、出放題に書き流すのは、散文としても下手なものです。

○
詩は言葉の音楽なので、すからリズム感がなくては不可ません。一つ晶子先生の歌で例を示しましょう。

かざしたる牡丹火となり海燃えぬ思ひ乱るる人の子の夢

青白し寒し冷たし望月の夜天に似たる白菊の花

○
初の歌は少女の激しい恋心を抽出せばこのように目もくらむ光景になろうかということが音楽的に歌い出され、次の歌には、晩秋の白菊の風情が、洗練された日本語のリズムを重ねてよくあらわされています。そして、リズムばかりでなく、詩の香気や匂いというものも高く漂って居ります。

○
これから皆さんと一緒に勉強してまいりますのに当り、以上思うところをのべてみました。

猶、投稿されたお作品について具体的なことを一々のべて行きたいと思えます。

歌壇を設けました。奮って御投稿下さい。
投稿規定 官製はがき一回二首以内とし、「浄土」編集部歌壇係あて、住所氏名明記の上送ること。



菊と蓮

——六代目菊五郎の片影——

池田立基

私が七十年の生涯に、勿体ない程、信頼を受けた人が三人あります。一人は私の寺の檀徒総代で、蓮で名高い不忍の池の端に、雨月荘という豪華な支那料理を経営していた須賀惣吉という人で、月に少くも二三回は温泉に連れて行って信仰談に没頭し、終に正念往生の素懷を遂げた人、もう一人は詩人吉田絃二郎氏で、氏は増上寺の大島法主に帰依し、毎月自邸に僧正を招待し、法話を聴かれた方ですが、奇縁と申しますか、私も同席して居りましたため、僧正西化後は、毎月一日必ず私の訪問を心待にせられる様になり、私の檀徒となり、最後臨終のお世話をする様になりました。時雨状の開封を私に依嘱される程の信頼を受けました。最後に六代目尾上菊五郎

興行をしている時代から、立見の見物の一人として憧がれて、一度でもよいから六代目の素顔が見たいという、とても叶わぬ望を抱いていたファンであります。ところが偶然の事から、六代目の口から「池田先生」という声を聞き、野球のグラブの様な手で握手された時には、天にも望む様な心地がしました。しかし私がそれ程六代目を思っている以上に、六代目も私を過信して、とてもえらいもののように思っていてくれました。誠に不思議な因縁と申しましょうか。僅二十年の交際でしたが、彼の生前に、私は飾り気のない言葉で、浄土宗の真髓である願生心を起させて、心ゆくまで正直な引導を渡した人の一人です。

静かな雨の降る秋の夜の読書という、私にとって至上の楽を、突然妨げた電話のベル

は、ほかならぬ六代目からの電話で「今迎えをやったから直ぐ来てくれ」というのです。殆んど隔日の事で別段珍しくありません。頓と当時では最贅沢なリンカーンが迎に来ます。午後十一時三十分です。乗り心地のよいクッションを楽しみつつ、麻布へ着きますと、六代目は猿股一つで、新橋の或名妓に墨染を教えて居ります。この名妓も真裸です。パンツ一つです。二人とも汗だらだらです。約三十分程して終わりました。「先生一風呂浴びて来ますよ」といって姿を消す。その名妓も次の間に下り、間もなく帰って行く下駄の音がしました。

湯上りの、くつろいだ姿で六代目は「あの位しほらなけりや、物にならねえ」と、それから約一時間は芸談の連続です。「時に先生、わっしもこの頃疲れを覚えて来ましてね、や



(写真説明) 左から二人目六代目、四人目、筆者)

「つぱり人間てえものは死ぬんだね」「そりや、だれでも死ぬんですよ。しかしあんたみたいな身体じゃ、まだ当分持つね」「所がそうでないね、いくら不死身といわれたわっしでも、この頃は休みたいという気がして来ましたよ、来月も上方へ行くのを止めたいと思つたんですがね、わっしが休むと弟子達の口

が上つたりになるんだ、だから休めない事になるんです。まあ弟子達に命を取られるということになるねえ、先生」

つくづく悟つたという調子でいった一言は飾り気のない、腹の底から絞り出した真言でした。何だか私は言うに言えぬ淋しさを感じました。こういう時には自然の勢で、死という事と、未来の事を、私に根堀り葉堀り尋ねて来るのです。平生は私が何の様に説明しても決して合点をしない、「よし聴いて置くよ」といった調子です。感心して聴くという事は私に屈服するような気がすると見えて、あの負けず嫌いな六代目ですから仲々承服しなかつたものですが、この晩だけはつくづく私に頼る気持をむき出しに示しました。

「まあ先生は強力みたいのようなもんだから宜しく頼みますよ、わっしは他の坊主は、ろくな奴はいねえ、日当だとか、河内山だとか、あんな坊主に引導を渡されたって極楽へなんか行けっこありやしねえ、先生なら安心して案内を頼めらあ。先生は日本一の坊主だからね、二十坊主だと思ふね」と大和田から来た

鰻飯を二人で喰べながらこんな話をする。朝五時頃、またリンカーンで送られて帰って来る。真相を知らない近所隣りでは、講安寺の和尚の朝歸りと、あらぬ噂を立てたものです。

しかし体の異状が、だんだん当人にも知れて来た時に松本幸四郎丈が逝きまして、告別式が東劇の玄関で行われました。私も参列して居りましたが、六代目の男衆が私の所へ来て「只今旦那がお工合が悪く、立って居られませんので、楽屋で休んで居ります、先生をお呼びして来いと申しますので、御迷惑ですが、一寸楽屋まで」私は急いで楽屋へ行きしまた。なるほど顔色が非常によくない。だが私の顔を見ると元気な声で「先生とても立っちゃ居られなくなった、長いからね。先生もつらかりうと思つて呼びにやつたんです」

この一言を聞いた私は六代目に喘りつきました。本当に腹の底から出る涙で目が曇りました。毎日の様に顔を見合つて居り一日に一度は少くも言い合いをする間でありながら、自分の辛さから私の辛さを思いやり態々男衆を使によこし私を楽屋へ呼び寄せた彼の心の底には、何という美しい情味のある男だろう

瑣事

人生を幸福にするためには、日常の瑣事を愛さなければならぬ。雲の光り、竹のそよぎ、群雀の声、行人の顔、——あらゆる日常の瑣事の中に無上の甘露味を感じなければならぬ。

人生を幸福にするためには？。——しかし瑣事を愛するものは、瑣事のために苦しまなければならぬ。庭前の古池に飛びこんだ蛙は百年の愁を破ったであろう。が、古池を飛びだした蛙は百年の愁を与えたかも知れない。いや、芭蕉の一生は享樂の一生であると共に、誰の目にも受苦の一生である、我々も微妙に楽しむためには、やはり微妙に苦しまなければならぬ。

人生を幸福にするためには、日常の瑣事に苦しまなければならぬ。雲の光り、竹のそよぎ、群雀の声、行人の顔、あらゆる日常の瑣事の中に墮地獄の苦痛を感じなければならぬ。

と胸の痛くなる程感じました。

その時です。「高麗屋が死んだ、わっしもいつか死ぬんだが、死ぬのは別にこわかあねえ。先生が引受けてくれたから安心さ、だが余りなが患はしたくねえ、出来れば道成寺を踊って鐘入りをする、釣鐘を上げて見たら、その中で打伏しになって死んで居たなんざあいいねえ」心から嬉しそうにいいました。この機会に私は彼に願生心をくどく説いて「声には限りがあるから大声で申さなくてもよい、それよりも腹の中で大きなお念仏を抱えることだ」と申しましたら、さすがは六代目です、手を打って嬉しそうに「ははあ腹芸だね」と晴やかな笑顔を見せてくれました。この時私は六代目に心残りのない引導を渡した積りです。その後益々身体の弱りが目について来ました。或日の事私を楽屋へ呼んで戒名をつけてくれといい出しました。そこで私は「戒名は菩提所の和尚がつけるのだから私は遠慮する」と申しますと、大層気嫌を損じまして「わっしは日本一の俳優なんだ、わっしの戒名は日本一の坊主につけてもらわなきゃ承知が出来ねえ、世間の奴等はどういうか

知らねえが、わっしや先生を日本一と思うんだから頼むんだ、いやかね先生」と涙ぐんでいうのでした。余りの真剣味に私も戯談がいえず承知しました。併し外ならぬ戒名の事ですから後日になって、いざこざの生ずる恐れがありますので、松竹の遠藤為春氏に楽屋へ来て立合って貰い「芸術院六代尾上菊五郎居士」とつけました。それを見て六代目は「こいつはいいや、誰にでもよく分るね」と喜んで見て居ましたが、少し変な顔になって「先生、目が抜けてらあ」と注意しました。そこで私は「寺島さん、伊勢屋三代目には目があるが、徳川三代將軍家光には目がねえよ」と申しましたら、黙ってしばらく私の顔を見て居ましたが「やっぱり先生はえれえよ、有り難う」と其の紙を疊んで懐へ入れました。其後たけ一寸位の小さな位牌を作って財布の中に収め、時々懐から出して前に据え、男女蔵君や松緑君に訓話をしたものです。昭和二十四年七月十日私と吉右衛門丈は柩前で号泣しました。其の吉右衛門丈も既にあの世の人です。

中南アジアで見た

雲の迎來御

幹翠野吉

玄奘の通った所

奇想天外と申しても、けっきょくは人間頭腦の所産である。夢にも見ないというが、すぐは思い当らないまでで、何れも想像されるなり連想されるならことの範圍を脱しないものである。たとえばきもを冷やす地ごくの諸相にしても、氣味の悪い餓鬼の姿にしても、同じことである。

私はかつて、中南アジアで、大空を埋めつくし、点々と東から西に走って行つた無数の雲を見て、これこそ諸菩薩御來迎の雲であると思つた。凡夫の悲しさで、菩薩さまのお姿こそ見えなかつたが、その数々の蓮台と同じ雲を見た。少なくとも御來迎の形は、この雲をそのまま写したものと、今でも信じている。

ところは天山山脈の西にあたり、パミール高原の西端に位する地図にもないアングレン地方でのことである。この辺近くに玄奘法師が通つた所で、仏縁に恵まれているというべきである。慈恩伝に緒時国と記されたところがあり、その南に葉河が流れている。この緒時が、今のウズベック共和国の主都タシケントの西方に当り、葉河がシル河上流である。この河の更に上流、タシケントの東南方約百五十軒がアングレンである。

もっとも私は、わざわざそこまで探検に行ったわけではなく、終戦後の抑留者の運命で、ソ連軍のために連れてゆかれたわけである。

大陸は広い

ここで一応同地の地形を記したいが、熱い南方の人にいくら雪の話をして納得してくれないと同様に、大陸の話も一般の人たちになかなか判つてもらえない。例えば、世界で一番深いことで有名なバイカル湖の南端を汽車が通っている。列車がその湖はんに停つたとき、夕方であつたが、有名な湖なので、一同降りたつて手や顔を洗い、水が冷いので驚いたりした。列車が進むにつれて、物珍しそうに湖を眺めていたが、その内あきて睡つてしまつた。さてその翌朝に目が覚めてみると、列車はまだバイカル湖にそつて走つていたのでまた驚いた。地図上では湖の南端を廻るにすぎないが、測つてみると、そこだけで三百軒位ある。三百軒なら直距離で東京——仙台に当るので無理もない。

ノヴォシヴルスクで、シベリヤ本線と分れ、列車は一路南へ下つてゆく。ただ曠野をゆくというより沙漠あり、都会あり、湖あり、草原あり、荒地ありで変化にとむが、一口でいえば不毛の土地

である。荒地というのは、木一本、草一つ育たないところである。犬一匹鳥一羽見かけないところである。いうなら富士山の頂上近くと同じことである。その中を列車は約二時間走っては停り、また二時間走っては停りながら走ってゆく。停るのは汽車が水を補給するためである。駅には水があつて、番人の小屋がある。駅の周囲には土で造った土民の家が十軒位は建っている。機関車も特別で、水蒸気を殆んど冷却して水にもどす仕組みになっている。景気のよい音をたてないかわりに、水の補給が少なくてすむわけである。

こうして本線から分れて南下すること三千何百軒に及んでタシケントに着く。青森——広島が直距離で千軒だから、ずい分長いというより広いものである。ここにきて、草木のあるところ、即ち人の住める所の方が地球上の特定のところであることを知った。私たちは終戦後、今日は帰す、明日は日本船が着くと毎日のように言明され続けながら、いきなりナホトカで列車に乗せられ、行く先も、その目的も知らされなまま、ここまで来てしまった。いくら貨車編成だからといって、ナ

ホトカで列車に乗ってから下車するまで二十五日間の長い日数を乗っていたのには、よくもここまで来たものだと思ひきれてしまった。

アングレンに着く

余談はさておき、私の着いた所は、想像でパミール高原の西端と判断した。ここは何とかと誰に聞いても、みなアングレンという。そこで山はアングレン山、川はアングレン川と勝手に名をつけた。とにかく西南に一つの山があり、夏でも頂上の雪が消えないので相当の高山に違いない、この山の麓が小屋の位置から更に永く続いて、山を背にした反対側は、ゆるい斜面をなして地平線に没する。この高原のまん中に水量豊かな急流が流れている。向うに木が見え家がある。一時間位歩いて行ってみるとポプラが二三本に、家が十数軒ある部落と知れる。その外には何も眼界をさえぎるもののない高原である。朝はこの地平線から太陽がでて、山に沈む。冬になると雪が降り、土地が三尺位凍りつく。濡れた手拭は、凡そ百米歩かぬ内に凍って棒になる。この雪が二月には消えるが、雪の下には草が芽ばえて、地面は青々となる。

三、四月には花が咲いて美しい。しかし雨がないので草も段々枯れて夏までには一面が褐色に変わる。

夏は暑い。余り暑いので、仕事の合間に石や岩のかけで涼をとる。すると汗がかわいで涼しいが、顔、とくに眉毛は汗の塩分で白くザラつく。昼夜の気温の差が大きいので、夕方方はそう快である。陽が西に傾くと、みな小屋の外に出て陽が山に沈むのを待っている。山がまっかにもえて陽が沈むと間一髪を入れずに一陣の涼風が吹くので、これ待たなければ。夜は毛布一枚ではすまない寒さに冷えてゆく。

そこは昔から大切な交通路をなしていた。時折はロバに乗った旅人、まれにはラクダを引いた人々が通った。羊を追いつながら日を積ねてゆく一群の人もあった。冬はどこにいたのか、夏になると川の辺に小屋をたてる家族もあった。小屋といっても、葺ばりをめぐらし、地面に布を引いただけで暮すものである。要するに遊牧の民である。

地の果を思わすような、こんなところに私たち六千名の軍隊が投入された。その前にソ

連囚人部隊が凡そ四、五千名が来ていて、仕事が始められていたが、更に私たちの投入されたわけは、この地に一大炭層の存在が明らかになったからである。

炭層の規模はよく判らない。ボーリングしても炭層の下までつき抜けられない。多分、厚さ四十米を下るまいという。巾は、これまた判らない。一軒あるのか数軒あるのか、石炭を掘り進めるより仕方がない。長さは、とても想像できない。

仕事というのは、この炭層を露天掘りにして掘り出すことである。経過は一切はぶくが、結果をみれば、運河を掘ってアンダレン川をその方に流し、鉄道をひき、上水道を作り、一朝にして小都市を作りあげ、石炭をどんどん掘り出すまでにして、ソ連は私たちを帰したのであった。しかも多量生産された似て非なる共産主義者をお土産につけて。

ご来迎の雲形

さて話をもどして、私が例の雲をみたのは、夏も終りに近づいたある日の夕方だった。私は小屋を出て、アンダレン山を背に、はるかに遠く地平線までさえぎるものがない

大平原をぼんやり眺めて立っていた。恐らくは、牛の耳ばかりを集めたものを炊事場に持ち込んだのを知っていたので、あの耳がどんな形で食卓にのぼるか位を考えていたことだろう。日本に帰れることはすっかり諦めていたので、ダモイ（帰国）のことではなかった筈である。それともかなり広く囲った墓地が、犠牲者でほとんど狭くなったことを考えていたのかも知れない。いやそれよりも、黒パン以外に歯にさわるものを喰べたことがないので、同じことなら流動物でも量を多くとさもしいことを考えていたのであろう。

ふと気がつくと、大空いっぱい点々として流れてゆく雲がある。水だま模様を描いたような雲だった。その一つを見ると、まさに仏さまの蓮台を下から見たのと同じ形であった。お盆のように平らな底をして、鏡餅のようにもり上っていた。蓮のうてなと形容するより外にない。

この雲が同じ距離と間かくを保って、東北から西南にゆっくりと同じ速度で歩調を合せて流れてゆく。私の頭の上にくると、手とどきそうに低く通る。はるか正面は地平線で

よく判らない。右をみても左をみても同じ大きさの同じ形の雲が走ってゆく。

私は思わず、この偉観に立ちつくして眺めていた。やがて私は、これは無数の諸菩薩がお揃で、どこかに行かれるに相異ないと思っただ。もちろん菩薩のお姿の見えるわけがないが、なんともいえぬ有難い気持になった。その内私は、こんな珍しい現象を、かつて玄奘三蔵もご覧になったに違いないと思ひ込んだ。なぜそう思ったか質ねられても、私には説明のしようのないことである。

どの位私が、この風景に見惚れていたか判らない。しかし遂には限りない数に根まけして小屋に入ってしまった、小屋に入ってから、玄奘三蔵でなくとも、むかしの聖者がこんな風景に接しただろうと思うと、きつとご来迎を目で見て感激したに相異なる。少なくともこの雲を描いて、直ちに菩薩たちの空を歩まれる姿としたことであつたろう。

私は、その時の感激を今以て忘れないし、あれは菩薩さまのお姿だったと今でも信じている。



地球の外の世界

日本宇宙旅行協会理事長

原 田 三 夫

人 工 衛 星

一口に地球の外の世界といっても、現在のところ科学者でもよく分らない。ソ連の手によって人工衛星第一号がうち上げられ地球のナゾ、宇宙のナゾをとく糸口が開かれたが、人工衛星とははたして何ものであるか、昨今のマスコミの力で皆さんも御存知とは思うが、簡単に申し上げると。

人工衛星という意味は「月」のことである。月は地球を廻っている。従って人間が科学の力で、物体をうちあげて、その物体が地球を廻っていれば衛星という。それは自然に廻っている。

たとえば、物を水平の方向に投げると、だんだん遅くなり半円をえがいて下に落ちる。これは空気があるからで、早く投げる

程遠くへ行きカーブはゆるやかになる。その理屈から、地球の面のカーブと同一になるように投げれば、「物体は外からの力が働けば運動を起す」というニュートンの法則があるが、この慣性、惰性の働きは大事なことで、人工衛星の場合は引力だけが働く、その早さは引力の強さによる、地面の上の引力と均合って飛ぶわけである。

ソ連の人工衛星第一号は地上五百キロの高さで楕円軌道をえがいて飛ばしている。速さは秒速八キロで地球の引力と均合っている。それ以上速ければ軌道が次第に長い楕円になるが、楕円である限りいつかはもとにもどってくる。その前後していれば落ちないわけである。そして引力の強いところ程速く飛ぶ、従ってその方向は地球の中心に向っているわけである。

それで宇宙旅行とはいっても、引力、磁力の関係でいきなり地球上から飛び出すことは出来ない。

やっぱりロケットをうち上げてニュートンの法則の慣性で月まで行くのである。この場合のロケットの燃料であるが、うち上げるときはともかく、帰りの分はどうなるか。ロケットから離れてしまっているのだから。ともかくロケットが秒速十一キロの速さになれば、月の引力圏内に入る。即ち地球の引力圏から月の引力圏まで行き、月に近づくわけであるが、さて？。

今日の科学では地上百キロ位までの処はわかってはいるが、それから先は不明である。それではこの重力のない世界の生活はどうなるであろうか。

宇宙旅行の中で最も重要な事は、呼吸機

能、生理作用を維持するため人間のいる気密室の状態をできるだけ地球上に近い条件に置くことであるが、人工的に酸素を補給し、はき出す炭酸ガスを処理しても、やがてはき出す炭酸ガスの量が多くなり意識が失われてしまう。このような生体機能をどうするか、順応化することができるか、またロケットの速度の変化、自転による意識の喪失、更に宇宙空間では地表をつつむ大気層と緩衝物が無いので、太陽や宇宙空間からの強烈な放射線が生体によつてどのような影響を及ぼすか、克服せねばならない問題は多いが、生物が太古の地質時代に約一億年かかって水陸両せい動物から鳥にまで進化したのを、人間はその百万分の一位の期間に制限の多い大気層から、はてしなく広がる宇宙世界へ飛び立とうとしているわけである。

人工衛星が飛んだといつても、宇宙線と動物、真空と動物、無重力と動物等々との問題は、たやすく解決できるものではない。たとえば、空気がどのように動いているのか、そこには太陽からの光で色々な事が

起つて宇宙線を出しているが、それが空気の中に入り、別な放射線になっているのか？、この外気層のナゾ、特に人間の生活に一番関係の深い太陽から来るエネルギーの変化を調べるのが、国際宇宙観測の大きな目標でもある。

科学の世界

科学といふことは、人間の感覚にふれる世界の現象をどこまでもくわしく調べて行つて原因、結果といふか、あらゆる現象の関係を極めていく学問である。「物」の関係を説明するのが科学で、解決するものではない。

人間には知りたいといふ心が強いが、その現象を知ることと「微妙」といふか、幽玄なことに鋭く還元するのが人間の人間たるものだと思う。

感じると云ふことは科学以外のものだと思う、従つて宗教はそこから生れる。科学者の中にはその感受性が必要だが、日本の科学者にはそれが少ない。西洋人、特に科学者には多い。

不思議とか不可思議に対し驚ろきを感じる

ことによつて、そこに情熱がわく、科学者にもそれが必要である、その情熱をもつて探求の道を歩むべきで、情熱を持ち得ない科学者は科学の職人といふべきだ。日本人にはこの情熱がない、これが日本の科学者の欠点だと思う。

この情熱を育てる為に、子供にも小さい時から、おどろきをもたせる事が必要である。

不思議とか神秘といふものを感じ、多くの人々に自然現象の面白味をもたせて、自然の神秘にみんなと一緒におどろきを与えることが私の念願である。その気持ちから、宇宙旅行協会の仕事をしている。

お経の中に「不可思議功德」といふ文があつて、尊いものを見出すといふ事が説かれていますが、不可思議といふものは、どこまでもとけない。

電気に、プラスマイナス、即ち陰と陽の二種あることは、なぜか分らない。引力も磁力も存在はするが、どういふものか明らかでない。

人間、特に科学者が、自然を征服すると

扉の御法語

扉にかかげた御法語は、「立宗に付釈難の御詞」のぼう頭にある一句です。この御詞は短いもので全文を記してもよいのですが、また短い文だけに、そのものズバリでまことに痛烈なものを感じます。

この御法語の句に続いて、天台は浄土に關する考えが甘い、法相は凡夫を見すているし、どの宗にしても適當なものがない。ここで浄土宗をたてないことには凡夫の救いがないではないかと一言の下に断じています。

凡夫とは、われわれのことですからもとより大したことはありません。聖者でない者、智えの浅い愚鈍の者のことですが、実は自分が凡夫であることに氣のつかない凡夫以下が大多数なのですから、この凡夫の救いが明かでなければ大問題です。従って逆に上人であればこそ、この大問題を解決し得たともいえましよう。

この上人の氣はくは、それに続く句の中にくみとられます。即ち念仏往生をすすめ

いうが、これは不可能というよりいけない事だと思う。

人間は自然の理法に従って生きて行くべきで、自然を征服する事はうなずけない。自然に対し我々は謙虚であるべきだ。

そこに宗教が生れる要素がある。原子科学も自然の現象を理解して出来たもので、人間が原子科学で地球及び世界人類を破戒したと思つても、自然はせせら笑っていることだろう。

自由主義國家のアメリカは原子力戦に賛成するのではないか、ソ連には人海作戦という手があるが、アメリカにはない。

軍縮に原子力戦をむすびつけても、何故人間の心を進歩させる運動を起さないのか。ギリシャ時代の知識階級の慧知より、現代人の方が劣るといえる。

世の中に勝負事があるうちは戦争はやまなと思う。ギリシャ時代の軍隊教練の産物であるオリンピック競技は、協調の精神をその側に高めるとしても、対抗、征服意識を増長させるし、また氣持の問題とはいへ、屠殺場の見学の帰りに平気でビフテキを食べること

はやがて戦争を生みだす。ささいな事であってもその感情が人類の大きな悲劇となる。生あるものの血を流さず、科学の力で食料が出来れば、それは解決されることだ。どんな小さな虫けらでも、顕微鏡を通して科学者の目にふれば、不思議な力がこもっている現象がみられる。即ち人間はこれを作ることは出来ない、魂のないものは出来ても、魂はどんなに科学が進んでも出来得ないだろう。

ほんとうの意味での平和運動は個人個人が争わなくならなければならぬ。

科学の明暗

世界宇宙旅行協會は、天体宇宙に関心を持って、見たり、考えたりすることにより、この小さな地球の上で対立することは非常におろかな事だと思ふだろう。そのような自覚を高める事も協會の目的である。

ここで地球の上での争を考えてみれば、過去においては国内間の争だったのが、国外へと進展した。やがては宇宙となれば、平和になると思う。

るだけなら立宗の必要がないとか、何も報土でなくて応土でもよいではないかと非難する者に対し、「その義をしらざるがゆへなり」とピシヤリ張り手をくれています。

汽車に乗るなら、二等でも三等でも先方に着く時間は同じです。旅館に泊るにも、一流も三流も同じ二食をつけて夜具もあたたかくしてくれるではないか。どうせ凡夫のことだから何も報土を望まなくてもよいではないかという議論です。

報土は、万徳円満の仏さまが居られるところで、最上級のところです。応土は、相手によって差異のあるところですから上等もあり下等もあります。東京なら帝国ホテルがありますが、田舎にゆくとたとえ一流と申してもお粗末なものもあります。

上人は、そんなあてにならないことではない、凡夫は、即ち社会一般の人間は、必ず最上級の報土に往生でき得るのだというのです。なぜならそれがアミダさまの本願だからと真向から断言します。ただし、この断言は、善導大師のお教えによるとこといわれています。

合掌

科学が進歩して自由主義とか共産主義というものが互に信頼し不信がなくなれば、世界中の人が安心してくらせるようになる。協会はそのをねらっている、外国でもそうである。宇宙旅行協会は世界に廿一カ国あり、アメリカに三、ドイツに二、アルゼンチンに二他は各一で、二五の協会がある。この中で政府機関にあるのはソ連のみである。

宇宙旅行は大きな事で一国で出来ることではない。世界が協力するところに、平和への道の一端が開かれることを念願としている。その意味からも、毎年国際親善を目的として家族づれの親睦会が行われている。現在はまだ競争的な面が強いが、やがて人間の自覚が宇宙に向えば争わなくなり、平和運動が実をむすんで世界国家が出来ることだろう。その為には人間がもっとかしこくならなければならない。科学的知識を知るだけでなく、科学的考え方をものごとを律して言動するようにならなければならない。

米ソの科学も目標は宇宙旅行にあるべきで世界を征服する為に進むのは、本当のことを両者が知らない故である。アメリカだとそ

う遅れているものではない。各国のミサイルの研究をあつめて研究会をやるようになるなければならない。

米ソの科学の発展の違いは、第一次大戦後ドイツの、理論科学者はアメリカへ、技術科学者はソ連へ行った。その結果の現われとみるべきだ。要はアメリカの実験不足にある。

水爆戦、原爆戦で人間が滅亡してしまえば話は別だが、宗教は、人間あつての宗教であるから、心の問題だと思う。神の摂理、即ち力が薄くならない限り、科学が進展することは神の摂理である。

原子科学というと暗い面ばかりを考えるが、人間には発展性があるから、地球が発展の限界に来れば、今度は宇宙に向うのは当然のことだし、また「かくや姫」の物語ではないが、何千年来月に人間があこがれていたか、どうして地球が出来たかわからない。月に行けば手がかりの一部が得られるのではないか。

本稿は原田先生に談話筆記させていただいたものです

(文責編集部)

新「修善寺物語」

隆 崇 生

修善寺温泉に遊んだ人なら、きっと知って
いるにちがいないと思うのだが——修善寺と
河をへだてた丁度むかい側の山ぶところに、
頼家の墓がある。松と松の丸どらかな山の斜
面に、「修善寺物語」に述べられた、あの悲
劇の主人公は苔むした玉石の下に眠っている
といわれる。

落葉敷く墓所の、石のきざしの下に「観
月閣」と名づける、古びた堂があつて、軒下
に、それも南の山を背負った陰の多い場所を
選んで、父娘二人の店がある。店というより
は、木組の台を据えて、その上にそこばくの
土産物を並べているのである。蘇鉄の実の根
つけ、竹のペーパー・ナイフ、同じく太竹を
無造作に四つわりにして、彫りものをした壁
飾り、そういった、みた目にはいとも貧しげ
なものが置かれてある。父は堂の軒下に、年
たけた娘は、それと対角の地面に、それぞれ

腰をおろして、ほそく、鋭利な刃物を手にし
て、客の需めに応じて品物に細字を彫りつけ
て行く。私は三たびここを訪れた。それも、
二年、三年と、時をへだててであつた。おど
ろいたことには、いくら時を経て訪れよう
と、この父娘のただずまいは、一寸の狂いも
なく、もとのままであつたことである。昨
秋、また、つれづれにここをおとなつて、今
更ながら、その感を深くしたのである。た
だ、父なる人の背はますます丸くなり、心な
し手もとがおぼつかな気にも思えるようでは
あつたが、その彫り込んで行く細字の書体に
は、何か、枯れ切つた、澄んだものがみられ
た。娘は、始めての頃は、湯治客の仇な心も
ひかねまじい、ふつくらとしたあどけなさ
が、今では、立派な女ざかりに、そういった
気配を、ピンとはねのけるような強さにまで
なつていた。

わたしは、そうした父娘が、ひっそりと、
山陰の落葉を浴びて送っている、静かな人生
を何よりも尊く思うのだが、それにもまし
て、いたく心に残つたことは、いつ行つても、
かわることないこの二人のただずまいの狂い
なさであつた。そこには、土地柄か、何か執
念にも通ずる、思いつめたものがあるような
気がするのである。何年も、何年も、父は軒
先に一寸の狂いなく坐り、そして娘は、その
父を、かばうが如くに位置し、二人共、黙々
として刀を執っている。そうせねばいられな
いといった執念というか、または、そうする
ことが、何か、動かすことの出来ない「さだ
め」であるのか、とに角、誰が何といおうと
も、決して動かぬぞといった、「氣迫」とも
名づけるものが漂っているのである。

このことに、蛇足をつけることが許される
ならば、こう、続けたい。——わたしは、そ
の台の上に並べられてある土産物の一つを手
にとつてみた。径、八分程の蘇鉄の実に、「南
無阿弥陀仏」の六字を中心に、その両側に、
それこそ目の弱いわたしには、さだかに見え
わめようとも出来ぬ細字で、経文が刻まれて

アミダさまの

坐像と立像

お寺のご本尊でも、家庭のごない仏でもアミダさまには、坐像と立像とがあります。普段は別に気にもとめないわけですがよくどちらがよいのかという質問を受けます。どちらも同じだといえ、それまでですが、人によって立像の方が正しい等ということがあるので困ります。これはやはり皆さまの感じている通り、どちらも正しいお姿なのです。

私たちの日常生活にしても、立っているか座っているかのどちらかです。立働いているときもあり、何か考え込んだり、人と談話するときには座っています。私たちの姿としてどちらが正しいということはありません。ただ、立働いているときには、立ったままのときと歩いているときがあります。

アミダさまの立像も同じことで、立ったままの立像と、片足を前に出されて動いたお姿をそのまま写した立像とがあります。坐像は、浄土にましまして御説法をした

りお考えになったりしているときのお姿です。如来のましますところは浄土の中心、七宝莊嚴の宝座であります。そして如来の光明が十方に光被し給い、この光明をあびて私どもは救われているわけであります。苦しみがいやされて、安慰されたものにとつて、坐像のどっしりしたお姿は、なんともいえない落つききを感じ得られるものであります。

立像は、多く衆生を来迎引接し給うお姿であります。救われてゆく衆生の心状からすれば、来迎し給う立像に一層の親しみが感ぜられます。光明遍照とともに無量寿の生き活くることも如来の重要なありがたいお働きであります。

同じ立像でも、立ったままのお姿は、衆生をごらんになつてゐる慈悲のお姿です。お歩きになつてゐるお姿は、ご来迎にもみられる通りで、衆生にお近づきになつてゐるところであります。

このようにして、坐像立像の何れかを正しいとする人は間違つてゐるわけです。お姿がどちらであつても、如来のお心にかわりのあるはずはありません。

あつた。よみ得ぬままに、老人に尋ねてみると、それは「阿弥陀経」の一節であるのと。しかも、彫りつつも、低音に誦しているのか、咄々とその一節を声にくれた。勿論、その読み方は、つかえつかえのたどたどしいものではあつた。が、こうもいったのである。

「はじめは、わからずに彫っていました。ところが、一つ彫り二つ彫り、毎日毎日、彫っているうちに、『即得往生』が『死ぬこと』はでないと分るようになりました。」

「執持名号若一日若二日……が、わたし自身の生活だということもわかつて来ました。ありがたいことです。こうして、毎日、彫らして頂けるといふことがありがたいと思えるようになりました」

可成り強い老眼鏡を、額におし上げて、ひと息休みながら、そういう父親の姿を、娘は静かにほほえんでいた。そして、黙つて、目を、うしろの山に移つした。そこには、薄くれないの山茶花が、松の木々の中に美しく輝いていた。

よごれた荷札

和良橋 高岸 玉莊

すっかり冬になりました。
北の国の山々はもう雪をかぶっていま

す。
こんな冬には、北の国では、とろろ
といろり火をたいて、みんなまるくなっ
て、いろいろと、おはなしをする日がつ
づきました。

ヨシオちゃんの家でも、いろりの前に
坐つて、おもしろそうなお母さんのはな
しを聞いていました。

ときどきドスンと音をたてるのは屋根
につもった雪がすべる音です。
もう夕御飯に近いときです。

「今日はとても寒かったね。」

お母さんがそういいながら、また薪を
ポキッと折つてはいろりに入れました。

今まで静かであつた入口の戸がガラガ
ラとあいたかと思うと、雪よけのかっぱ
をきた運送屋さんが、

「今日は。」

と、入ってきました。

「小包です。ハンコをください。」

運送屋さんは小さい紙ぎれを出してお

母さんにわたして待っていますと、お母さん
は、奥へいって、タンスの引出しからハンコ
を出して、自分の手のひらの上に紙ぎれをの
せてギュッとおしました。

「ありがとうございます。」

「はい、ごくろうさま。」

運送屋さんがかえってしまったあと、台所
にはあまり大きくはない木の箱が一つ残って
います。

「お母さん、この箱なあーに。」

「さあ、なんでしよう。」

お母さんは、その箱をさげて、ゴロゴロと
ひっくりかえしてみました。

「まあ、ヨシオこれは源吉おじさんとここら
だよ。」

木の箱についている荷札はもうドロドロに
よごれていて、やっと字がみえるくらいで
す。

「ふうん、源吉おじさんがなにをくださった
の。」

ヨシオはその箱のそばによって、力一ぱい
さげてみました。

「お母さん、ちよっと重いよ。」

「そうね、なんででしょう。」

「早く見たいな。」

「じゃあけましょう。」

お母さんはなわをほどきました。

するするとなわがとけてくると、何度も何



度も汽車から汽車へつみかえられたのか、箱

の板にうちつけてあるクギがゆるんでしまっ

て、その間からきいろいみかんが顔をのぞか

せています。

「あら、お母さん、おみかんよ。」

「そうね、おじさんのお家にみかんがあ

ったかしら。」

「あのー裏山のところにあったのが、み

かんとちがうの。」

二人ははなしながら、なわをほどくと、

もうみかんが、ゴロゴロと板の間から出

てきました。

「よく、汽車のなかでこぼれなかったわ

ね。」

みかんは大きい、小さいのなどとり

まぜて三、四十も出てきました。

ヨシオちゃんはその一つをとって、に

おつてみると、プーンとおいしいみかん

のかおりが鼻をつきました。

「ヨシオ、このおみかんで思い出さな

い。」

「なあに。」

こと。」

「そう、そう。」

ヨシオちゃんも、お母さんもみかんの箱を

はさんでにつこりと笑いしました。

今年の夏、お母さんとヨシオちゃんははじ

めてこの源吉おじさんのところをたずねたの

でした。

そして海のみえる裏山にのぼって、生れて

はじめて、汽船をみたのもこの源吉おじさん

のところでした。

「あのときの小さい青いみかんがこんなにな

ったのね。」

「そうよ。ほんとに小さいみかんだったの

に。」

「お母さん、来年も源吉おじさんのところへ

いきたいね。」

「そうね、ひまが出来ればつれていってあげ

ますよ。」

「うれしいな。」

ヨシオちゃんはにつこり笑いしました。

「さあさあ、それより早くお礼のおはがきを

書きなさい。」

ヨシオちゃんは、鉛筆をお母さんはハガキ

道徳教育のゆくえ

道徳教育について、真剣に平静に各方面からの論議がだされ、次第に結論に近ずいてきたようである。いつも思うことだが、こうした問題の賛否両論をみると、まるで両極端としか思われない議論で対立している。大きな

振子のように、右に左に振巾の一番大きくなったところに立って議論をしている。どうしてもっと中道に近いところの議論がないものかと嘆じたくなる場合が多い。

一般のものにとって、とくに親たちにとって、教育に関して極端なことはあり得ないと考えている。なぜならわが国は独裁政治でもなく、戦時体制にもおかれていないし、ただ民主政治をなんとか向上させたいと欲しているからである。だから学者たちが、「親孝行、愛国心、民族精神、その他の徳性の振興のため」に道徳教育の強化、道徳教科の特設が上から主張され、それが国民大衆の希望と一致しているかのようにいうが、これは政教一致、

国体明徴などの古い教育と同じものだ」と主張されても、どうもすぐに納得できないものがある。

道徳教育の強化、道徳教科の特設が、即ち政教一致、国体明徴と同じなのかどうか、要するにその内容によるものであつて、政教一致が恐ろしいがために、道徳教育の強化に反対することがわからないのである。

もちろん学者ばかりでなく、一般の教師にしてみれば道徳について教育を行っているのであつて、充分道徳の重要性を認めているのである。教科として独立させ、特別な時間を設けているわけでないが、全教科を通してあらゆる機会に必要な教育は常に行っているのである。

学校教育法にも

「人間相互の關係について、正しい理解と協同、自主及び自律の精神を養ふこと」

「郷土及び國家の現状と伝統について、正し

をとりにたちました。

「お母さん、源吉おじさんのところどこなの。」

「そうね、この荷札をみましょう。」

お母さんは、さっきのみかんの箱の荷札をじーっとみました。

雨にあったのか、泥にまみれたのか、荷札の文字ははっきりとはよめません。

「お母さん、ぼくがみてあげましょう。」

ヨシオちゃんは、その荷札をもつてよんでいると、荷札のなかからあの元気そうな源吉おじさんの顔がうかんでくるようでした。

「お母さん、やっとなつたよ。」

「そう、じゃお札を書きなさい。」

ヨシオちゃんは机に坐つてお札のハガキを書きはじめました。

机の上におかれた荷札からは南のあたたかい海のほとりの風がのってきたように、磯の香りがただようてくるのでした。

そしてよこにあるみかんからも、おいしそうなにおいが部屋中にひろがってきました。

よれよれによれた荷札をお母さんとヨシオちゃんはながめてうれしそうに笑いました。

(おわり)

い理解に導き、進んで国際協調の精神を養うこと」

と記されている。また教科書の内容からみても、三十一年度の国語教科書によれば（東京教育大、唐沢富太郎氏による）

個人に関するもの——勉強努力、勤労、自主独立を説いたもの—— 四六・六％
社会に関するもの——公益、人間愛、協同を説いたもの—— 三二・〇％

家庭に関するもの——親子愛、兄弟愛、家庭内の道徳を説いたもの—— 一三・〇％

国際社会に関するもの——国際愛、平和等を説いたもの—— 五・五％

国家に関するもの——愛国心、国土等について説いたもの—— 一・九％

これを他と比較すると、特に家庭に関するものが、戦前の国定教科書——

—— 九・五％

アメリカの代表的教科書—— 四・一％

国家に関するものが、国定教科書—— 二二

％から五八％、アメリカの教科書六・一％

となり家庭に関しては他より多く、国家に関しては他より少いことがわかる。

国語ばかりでなく、社会科でも数学でも、

それぞれの機会を利用して道徳について教えているわけである。ただし「親には孝行しなければならぬ」とは教えない。たとえば「母親の顔いろが悪い」という記事があれば、どうして顔いろが悪いのか、どうして母親が過労なのか、どんなお手伝ができるのかというように教える。

教育とは、こうあるべきものであって、これに異論のあるはずはない。ただ、全教科通じての道徳教育の結果に対する信不信の問題なのである。実情からいうなら、どの教科をとってみても、道徳教育にまで手をのばす余裕のないことも事実である。少なくとも成果をあげるまでには行われていないことは認めざるをえないであろう。

それにかつての傾向の残さがまだある。つまり家族制度といえは封建制の代表であり、国史といえは偽まんと侵りやくの連続であり、上長に従うことは卑屈であり、等のかつての傾向がぬけきらない点がある。そのため、全教科を通じて行われる筈の道徳教育が、はたして行われているかどうか疑問を持つ者が多い。

が多い。

また道徳教育の振興を必要とする者も、まさか戦前の修身科の復活を考えてはいまい。教育課程審議会でだした結論に、道徳教育のための時間を一週一時間設けるとあるが、「道徳教育の時間は、教科として扱わない。その他の教科のような成績点数はつけない」というのも当然である。教えられた道徳をよく憶えて満点をとるのもおかしい話である。更に同審議会で、「子供向けの教科書は作らない。読物、新聞、テレビ、ラジオを使い、日常生活や社会的のできごとを教材として使う」というのも妥当である。いかにしん重な考慮が払われたものでも一定の教科書がない方がよい。これが正式にきまれば、文部省では、徳目の列記された指導要領が出されるであろうし、とかく括一的になり易い恐れがある。

それにもかかわらず道徳教育のために、教科でない特定時間を最少限度に設ける方がよい実情である。そうなればホームルームとの関連した問題がある。（編集部）

信仰相談

(質問歓迎)

担当 佐藤賢順

問

わたくしの父は或る大学で文学の教授をつとめていましたが、十年ほど前に引退しました。日頃は宗教についての理解も深く、とくにお念仏の道にも心をよせておりましたが、近年パーキンソン氏病という中風のような病気で、寝たり起きたりしております。この病気は顔の筋肉がだんだん硬わばつてきて、能面のように動かなくなるのが特色です。特に唇のあたりの筋肉が硬直して動かなくなりますから、笑顔というものが見られません。近頃、近所の××会支部の人達が見舞いに来てくれて、生き物を殺したあたりでこんな病気になったのだ、というのです。そしてわたくしに(あなたは蛇を殺したことがあるだろう。何匹殺した?)と聞くのです。わたくしも子供の頃、田舎で蛇を殺したことがあるかもしれないので、(二匹や三匹は殺したことがあります)と答えました。すると、

そのあたりでお父さんがこんな病気になったのだ、あの顔を御覧なさい、唇が蛇の口に似てきたではありませんか、というのです。そして支部のおかみさん達が五六人、毎晩きては枕元でお題目を唱えて、この信仰にはいつて、さん悔をしろ、さん悔をしろ、とせまるのです。その上に、ばかばかしいことには、蛇は八匹殺した、と向うできめてしまつて、それぞれの蛇に戒名をつけてやつて供養しなければ、たたりは消えない、戒名料を一匹百円ずつ、八百円お出しなさい、というのです。

初めはばか気ているので、父も気にしませんでしたが、何度も何度も言われているうちに、なんとなくそんな気がしてきて、父もその気になって八百円出しました。

その後もしつこく毎晩きて枕元で、お題目です。その騒しさの為に病気も却って悪くなってくるようです。たたりなどということが

サル社会のおきて

上野動物園のサル仲間、内輪もめのしたことは、まだ皆さんの記おくにあると思います。動物園のサルといたただけで、坊ちゃん嬢ちゃんが大喜びするほどの人気ものです。が、なかなか難しい問題があるようです。ながらくボスの地位にあった太郎ザルが死んで、次代のボスに何ザルがなるかがもめたわけです。初めのうちは太郎の妻ザル花子がボスになって支配していたところ、女の悲しさで、だんだん花子の新夫ザルがボスに代つてきました。ところがそのザルが急死しましたが、これが謀殺だろうと噂されたものです。あんな狭い、しかも飼われている仲間でもこの通りです。自然のサル社会は、もっと厳しいことが想像されます。宮地伝三郎先生はサル社会にくわしい方です。宮崎県の幸島にはサルがすんでいます。このサル群について面白い話をされています。

ボスの性格によつて、それに率いる一群のサル社会の性格まできまるそうです。幸島の一方のボスが保守的で、他方が進歩的だそう

あるものでしょうか。(練馬区一女性)

答

お父さんは大学の文学の教授を長らく勤めたお方だということ、それほどに教養の高い人でも、長い病気で苦しんでいるときには、はたからいろいろと言われると、近所のおかみさん達の言葉にも、つい動かされるようになることがあるのです。長い病気や苦勞が続いていると、気持が弱くなっていますから、ちよつとしたつまらない言葉も、つい気になって、動かされるのです。しかしこういうときが大切で、ふだんの平静を失わないようにして、つまらぬ言葉に迷わされないようにしないといけません。間違つた言葉に引きずられて、却つて迷ひは一層はなはだしくなるばかりです。殺した覚えもない蛇のたたりなどということは、あるはずがないのですから、病気は医者にまかせて、もとのような平静な心にかえつて、お念仏を唱えるようにお勧め下さい。こういう時が一番危い時ですから、あやしげな者を近づけないようになさるのがよいでしょう。

問

お釈迦様も仏様、阿弥陀様も仏様だと聞いていますが、このお二人はどう違

うのですか。どちらを拝めばよろしいのですか。(静岡市中川一郎)

答

お尋ねの通りお釈迦様も釈迦牟尼仏といつて仏ですし、阿弥陀様も阿弥陀仏です。お釈迦様はかつてこの世に實在して、長い修行をして、悟りを聞いて仏陀となつたお方です。仏陀となつたとは、目の覚めた人になつた、ということです。そして多くの法、眞実の教えをお説きになつたのです。その沢山の教えの中で、最も大切な教えは、阿弥陀仏は衆生を救済して下さる仏で、南無阿弥陀仏を唱える者は、必ずこの仏のお護りとお救いを受けることができる、という教えです。ですからお釈迦は悟りを開いて、阿弥陀様のお救いの力を体得せられ、人生苦に悩む者に、この救いの力の素晴らしさを教えて念仏をお勧め下さつたお方です。阿弥陀様は大智慧と大慈悲とが一体となつて、宇宙の隅々にまで力強く働いている無限の生命力、救済力です。このお力が實在の人、お釈迦様の口を通して、救いのお言葉を語つた、といえはよく解るでしょう。本仏は阿弥陀様ですから、阿弥陀様を拝んで下さい。

です。これが食べものを初めいろいろの日常生活について、明らかに保守、進歩の相異があらわれているそうです。先生の説明によると、更に興味あることに、

「力だけで若者の大将に納つてゐるようなサルは、やがて没落するか群を離れる。

群の警戒にあたるとか、何かの役割を自分から買つて出て、忙しくしてゐるようなサルは、やつぱりいい地位を保つてゐる。

そんなヤツが次代のボスになるのだろう。」ボスは一切の支配権をもつていて、サル社会はボスを中心に規律正しく暮してゐます。

それだけに名実ともに、その社会の実力者でなければおさまらないのも当然です。それが単に腕力だけではボスと認められず、いずれかは追われてゆく点が面白いと思ひます。

普段から骨の折れる仕事とか、ほかの者のために献身的な動作がなければ、群の信用が得られないわけです。全くサル事とは思へないというしやれのように聞えますが、野性の社会の正直さが感ぜられます。不正直を目標として動く社会が恥しい思ひです。

ドイツ復興の原動力

松 本 徳 明

復興は合理的な努力

いつものことながら、ドイツを視察して帰った人は、ドイツはすばらしく復興した。ストがない。どうもドイツ人の根強い底力には驚いた。あの復興振りは、二十世紀の奇蹟だよ。と褒めちぎる。

私はこれを聞くたびに、褒めるばかりが能ではあるまい。それはどういう訳か、どこに原因があるんだ？と深く考えてみたらどうだ。と突っ込んでみる。がこれに本当に答えてくれる人は、皆無とはいわないが、全くすくな過ぎる。これには私の方が驚かされ、なさけなくなる。

同じ敗戦国、日本とドイツである。しかし破壊された程度からいえば、ドイツの方が大

きい。東西挾撃、ローラーをかけられたようにきれいに破壊されてしまった。廢墟に帰したドイツが、起ちあがって、今や五十数億ドルの輸出、それと殆んど同額の外貨をだきかかえているんだから、一見、奇蹟に見えるのも無理からぬことであろう。がしかし、それには、そうなる理由があるのだ。何も特別秘訣というものがあるわけではない。

いったいドイツ人は理窟っぽい国民だ。理窟どおりにやりたがる民族だ。なんでも合理的にやる。こんどの復興も全く合理的に努力した結果である。かえって、ドイツ人から見れば、日本の現状が不思議なんだ。あまりにも幸運すぎるように彼等には思われる、と同時に無駄が多く、遠廻わりし、不合理だと、ドイツ人の眼にはうつっている。

ドイツと異なる日本憲法

先日、私がドイツで教えた学生で、今は或会社の社長をつとめている男がやって来た。彼はかつて戦前、日本に交換学生で来たことがあり、こんどは、二度目で、戦前戦後の日本を比較する資格がある訳だ。日本を飛び廻り用務を果して帰える時、私を訪ねて来て曰く、

「日本は一体何をしているんですか。いくら戦争に負けたからと云って、こうまでまいらなくてもよいではないですか。」

憲法を初め、学制までアメリカのいう儘になったんですね。労働組合のあり方、労使関係等、いずれもドイツでは卒業しているのに、日本は三十年も前のドイツのやり方をその儘繰り返して、まごついてるじゃありませんか。そればかりか、一般の人の考え方が随分変化しましたね。よい点もあるが、だらしな方向に走っているのもあり、自主性がないではありませんか？。

自動車はふえましたね。パチンコ屋は日本中到處にあり、若い働きざかりの人々が、

はいつて居り、これには驚きました。あれは

フィンガー・インドストーリー（指先工場）です。しかし何物も創造されない工場です。

先生！日本の人生観、世界観、仏教哲学の考え方等は一体どこへ行つたのですか？」

と真面目に、いくらか憤慨して語り出した。

そこで、私は、

「君のいうことは、私もいいたい事柄だ。そんな事は百も承知している。判り切つた事をいう必要はない。」

と答えると、彼は、

「そんなに判り切つてゐることを、なぜやるんですか？」

と仲々元気がよい。私も困つたが、ドイツは戦争に勝つたり負けたりした経験がある。だから敗戦だからといって失望はしない。復興のやり方も心得てゐるんだ。要するに負け癖があるから、負けっぷりがよい。しかし、日本は敗戦の経験がない。こんど初めて負けたから、徹底的に腰を抜かしたんだ。それで、あんな混乱を起しているの、いまに常態に復帰するにきまつてゐる。あまり心配しなく

てもよい。と述べた。

彼は判つたような、判らぬような、変な顔をして、そうか、と云つて、他の話にうつつた。が、これで問題が解決ついた訳ではない。

我々日本人は、真剣に反省しなければならぬのではないか。いかにしても、敗戦日本は自主性を失つたと云わざるを得ない。アメリカ占領軍の云いなりになつた儘ではないか。アメリカが日本を去勢しようと思つて行つた政策を後生大事に守つてゐる姿はあまりにも哀れであり、自主性がなさすぎる。憲法にしたつてそうだ。

占領治下、国民に自由がない時に、民主主義憲法が出来るとは言はないか。アメリカ占領軍が大急ぎで作上げたものを殆んどそのまま翻訳して、それが日本国憲法だとは何事ぞといわねばならぬ。もちろん全訳とはいわぬ。いくらか改変した所はある。しかし、それも一々占領軍の意向を聞き、同意を得たものだけが、通過したんだ。そんなものは、真実日本国憲法ではない。こんな簡単な常識が現在まだ通用しないんだから、外国か

ら馬鹿にされるのも無理はない。

ドイツでは、占領四カ国が、ドイツ憲法制定を命令したが、断じて拒否した。色々経過を経て、ドイツ憲法は作らない。国家基本法を過渡時代の秩序保持の爲めに作るという大前提で起草し、第四百四十六條に、この基本法は、ドイツ国民が自由決定によつて作つた憲法が施行せられたその日に効力を失う。と明記してある。今は憲法を作らない。只国家基本法があるだけだ。

日本では、今尚、或は三百代言的に牽強附会の説をなすものがあるかと思えば、便乗主義者もあり、憲法問題は全く五里霧中である。教育制度だつて同様だ。

繰り返された賃金闘争

今少し掘り下げて、経済問題を検討してみよう。

ドイツにはストがない。ドイツ経済は素晴らしい発展興隆をとげたという。その通りだ、しかしそれにはその原因があり、理由がある。その辺の消息を述べることにしよう。先ず第一次大戦後のドイツは、今日の日本と同

様ストは盛んだし、失業者は路傍にあふれ、社会政策に使う金で、国家財政は破産に瀕するという情勢に追い込まれた。

その当時の事情はこうなんだ。労使の関係からいえば、労使は宿命的対立者の関係にある。これは、マルクス経済学の最重要ポイントの一つであって、彼の資本論の中心をなすものである。

即ち、使用者は一定の賃金、たとえば一日百円を払うとする。労務者は食わんがために、百円貰って労働力を商品として使用者に提供する。そして八時間労働すると仮定する。その場合労務者は五時間働いて、百円の価値ある品物を生産したとする。そうすると労務者は使用者から百円貰って五時間働き、百円の価値を生産したという事になる。それで、プラスマイナス、ゼロですべてを精算された訳だ。

しかるに労務者は余分に尚、三時間働いて六十円の価値を余計に生産したとする。この余分の六十円の価値を使用者が取るということはけしからん。それは不当搾取だと叫ぶ。ここに労働争議の根本原因があるのであつ

て、この闘争は運命づけられた不可避の性質を持つのである。

さて、この五時間をマルクスは、必要労働時間といい、三時間を余剰労働時間と呼んだ。その余剰労働時間で生産された価値を余剰価値という。余剰価値の争奪戦が労働争議の中心をなす賃金闘争である。

闘争は強い方が勝つ、労務者は数に頼って闘い、使用者に損害を自覚せしめて勝つ戦法をとるが、最後は暴力を用いる事は当然である。生きんがため、勝たんがためである。ここに暴力革命の必然性があるのだ。以上はマルクス理論だが、第一次大戦後のドイツは、この理論を大体忠実に行った。団体交渉で、六十円の内から三十円労務者が、賃金増額分として、かちとったとすると、使用者は生産品の価格をあげて利潤を確保する。仮りに価格を三十円あげれば、使用者側の利益は以前と同じだ。労務者の実質賃金は直ちに下る。だから労務者はまた賃金闘争をやる。使用者はいくらか労賃を上げて、徐ろに物価をつり上げる。所謂、労賃物価のいたちこつことなる。

その結果輸出不振、経済界衰退、当然、生産制限、或は工場閉鎖となる。その結果失業者は増大する。国家は失業者を救済しなければならぬ。遂に広い意味における社会政策に要する金だけで、国家財政は破綻を来すという結果になった。

此処において、国民は深刻に反省せざるを得なくなった。高物価で輸出が出来なければ、食料や諸原料を輸入することは出来ない。国家衰亡して、労働組合員だけが、その生命財産を確保することは不可能だ。

組合員が自己の生命財産を保障せんとするならば、先ず国家民族全体を豊かにし強力にしなければならぬ。と、自らの体験を通じて自覚したのである。

これが所謂公益優先の考えであって、ナチスの発明品でもなければ、ナチスの専売特許でもない。国民大衆の自覚である。ナチスはこの大勢に乗ったに過ぎない。しかしナチスは確かにこのスローガンにより、労使関係を統御し、其の他の政策と相待って強国ナチスドイツを作り上げた。そして第二次大戦で、惨敗してドイツは廢墟に帰した。

ドイツにはストがない

廃墟に立った労使は静かに考えた。我々が生きるためには、どうしても此の我々の工場を再建復興させ、良品廉価の特色ある製品を多量に生産して行くより他に方法はない。外国を頼りに、その援助に依存してドイツ民族は勃興するものでない。このことは従来充分に経験している。自ら助くるものを助くだ。

輸出を盛んにして、食料等の生活必需品を初め必要物資の輸入を確保しなければならん。と労使協力して、一生懸命に働いた。煉瓦の片付けから焼跡の整理、焼け残りの旋盤の整備等、全く真黒になって働いた。そこには労使の軋轢もなければ、利害感情の対立もない。運命共同体の伴侶として、お互に激励しあつて精進した。

この運命共同体の考えの中には、労使の対立関係はあり得ない。ただパートナーの関係があるのみ。テニスで云えば前衛と後衛の関係であり、勝敗共同である。労使が運命を同じくするパートナーであるという自覚は、マルクス、エンゲルスも全く想像し得なかった

新発展であろう。

斯くして次第に隆盛を極めるに至ったドイツ

経済界にストが無いのは当然ではないか。奇蹟ではない。但しその結果生れた利潤の分配を初め、経営全般にわたつて労使が共同決定するのも当然であろう。この現実に対応した法律が出来るのも亦自然である。これが所謂ドイツの共同決定法であり、企業組織法等である。此処で注意すべきは、共同決定にふさわしき現実が先に生れて、しかる後に法律が出来たのであつて、その逆ではない。

余白が無くなったから結論を急ぐが、以上ドイツに於ける労使関係の変遷を眺めて、日本の現状を顧みる時、三十年のギャップがあると考えませんか、三十年の遅れを三十年かかつてうめるのなら、人間に智慧というものは必要ないと思う。

労使何れも反省して三十年を五年三年に短縮することは出来ないものか。日本人は過去の経験にかんがみて出来る、その能力ありと信ずる。まして、ドイツの新しい労働観より、日本古来の労働観は論理的に遙かに徹底しておるにおいでおやだ。(芝学園長)

会員各位にお願い

一、支部を結成して下さい。

1 会員五名以上で支部をご結成下さい。

2 支部ができましたら、支部名と事務所の場所を教えて下さい。

3 支部に括めて「浄土」をお送りする方法と、支部員各位に当所から別々にお送りする方法があります。

それ何れかになさるかをご明記下さい。

個々にお送りする場合には、支部員の住所ご芳名をお教え下さい。

4 会費は、なるべく支部において括めて御納入下さい。

5 支部には、支部拡張用としてお申込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。

6 二十名以上の支部には、毎月浄土を一部贈呈します。

二、会費を変更しました。

1 正月号より会費を金四百八十円に改正させていただきます。但し送料不要です。

2 一部の定価は金四十円で、送料四円です。

3 これは増頁のためご諒承願います。



一切衆と俱に

—無量寿経講話(二)—

佐藤 密雄

年々才々人は同じからず、今年こそは一ふんばりと情熱をもやす若い人もあろうし、一休ならずとも、楽しくもあり楽しくもなしと静かに盆栽をいたわる老大家もありましょう。しかし新春ともなれば、たとえ宇宙に犬が廻ろうと、月旅行に発つ人があろうとも、やはり心新たに祝う気持ちになります。

この新年号から依頼をうけて読者各位とともに、信仰の根本をなす「無量寿経」を読んでみたいと思います。

西方浄土に往生しようとする「無量寿経」の信仰は、何も不思議のない当りまえのように感じていますが、実は仏教の中の全く特異な信仰なのであります。天台宗にしろ、真言宗にしろ、その他多くの仏教は、真理を悟り、これを体现しようとする仏との直接の対決をなしています。ところが浄土の教えは、真理(法)と人との間にアミダ仏(浄土)が介在しているのです。

従って、浄土教は、智者のものでも愚者のものでもありません。愚者が愚者のままで、宗教の光りに預かれるということです。上人の御ことばに、「念仏を信ぜん人は、たとい一代の法(全仏教)をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」と強くいきられています。

これだけ申しても、いかに「無量寿経」が仏教の中で特別に大切なものであるかがわかります。次に順を追って申し述べましょう。

○

「無量寿経」という言葉の意味は「アミダ仏のお経」ということです。即ち、無量寿経は「アミダ経」というのと同じことです。アミダは梵語をそのまま音で表したもので、その意味は、無量寿と無量光の二つからなっています。無

量寿と無量光を一度に表わすためにアミダと申したままです。しかし本經をアミダ經といつては、もう一つ「アミダ經」がありますので、これを區別するため、本經を大經といい、他方を小經ともいっています。

無量寿とは時間的な永遠性を表わし、無量光は、空間的な無限性を表わしたものです。無量寿仏という名も、無量光仏という名も相当多く用いられていますが、しかし念仏するときに南無阿彌陀仏と唱えることから、アミダ仏という用い方が断然一般的です。

○

日本に無量寿經の伝えられたのは、欽明天皇十三年（五五二）に百濟王が仏教を日本へ伝えた時だとされています。しかし聖徳太子の著作の中に「無量寿經に曰く……」の文字がありますので、太子は本經を読まれていたわけで、本經の伝来が極めて古いことを物語っています。

經には、真理を悟らしめる經と信仰を喚起せしめるものとの二種があります。法華經は前者で、本經は後者の代表的なものです。

本經は、上下二卷になっていて、下卷はアミダ仏が西方浄土を完成させることが記されています。下卷は、完成した西方浄土の現状が記され、かつそのような浄土は全部私

どもの享受のために莊嚴されていること、そしてまた、その享受は信仰の一念にあるとされています。

法華經は思惟の經で本經は信仰の經です。法華經は、法華經の力で成仏し仏となろうと願っているのですが、本經は、念仏により未來に西方浄土へ往生しようとして願っています。

近來の現世利益の新興宗教は、ほとんどが、南無妙法蓮華經と唱題する系統で、本經の系統からは現世利益的な新宗教は発生していません。この点から、本經はまことに清信の宗教の基盤となる經と見られます。

○

本經は、釈尊が印度の王舍城市外の靈山で説かれたもので、そのとき集った人々は一萬二千の多数でした。この一萬二千の大衆の中には種々雑多の人々がいたというより、あらゆる人を網羅していたわけです。普通の人はもとより、神通力のある人、仏道修行者、多くの直弟子たちの名が列記されていますが、さらに重要なことは、仏教の代表ともいべき普賢菩薩を初めとして有名な諸菩薩方も列記されていることです。

菩薩とは「悟る人」で、悟りを得たいという心願（菩提心）をおこして仏となる修行をなしつつある人です。しか

し「仏となる」と申しても、自分だけになるのではなく、「一切大衆とともに」であります。そのため大衆がもし貧困苦難にあれば、そのような社会的障害の除去につとめねばなりません。社会悪が人々の心を汚濁している時は、その淨化につとめねばなりません。つまり菩薩のなすべきことは、「社会を淨めて仏国土にし、すべての人が菩薩となり仏となるようにする」ことです。

もちろんこれから説かれるアミダ仏の願と行とこそがこの菩薩行の範とすべきものですが、しかもまた後輩の菩薩たちを加護し、その同じ目的を達しさせようとするのが、アミダ仏の本願であります。そのためまず八相が説かれます。八相は、実は釈尊の伝記を八章に分けたときの八つの主要な項目のことです。しかし八相に分けて釈尊伝を記すには、単に二千五百年前に印度に出現されただけの史上の釈尊でなく、釈尊の歴史以前の前生に永い菩薩時代のあったことを記しています。

○

すべての菩薩はひとしく「大衆とともに菩提を成じたい」と願いを起して、その願いを目標に菩薩行を行ずるのです。アミダ仏の前身である法蔵菩薩もまた同様に願いを起しました。菩薩行の目的となる願を設定することを誓願を立て

るといいます。法蔵菩薩は、四十八の願を立てました。四十八願の内容は回を改めますが、四十八願が成就を期している浄土は、

1、至純な光が輝いている。その光は罪の汚濁を消し去って、ただ真実のみを照し出します。

2、その人間は感覚の欲や感情の執着に支配されずに真実に極めて素直で、真理を表現実行するにすべての条件が具っています。

3、十方の世界から諸菩薩が来って仏に聞法し、仏を称讃します。

4、風声鳥鳴すべて教法を語り、菩薩の仏道を増進せしめます。

5、十方の人を聞名等の功德で来生せしめ、人間には菩薩の能力を、菩薩には成仏の確信と菩薩行を実行する力と勇氣とを与えて、十方の世界に行きて、大衆を利し苦を救って無上正真の道を立てさせます。

6、この浄土には十方の仏土で諸仏菩薩の行ずる仏事が明鏡を見る如くに写し出されます。

7、浄土の他流塔堂一切は無垢清浄を意味する珍宝から合成されています。

と、これで浄土の設計図を完成したことになります。

浄土の設計図ができたとしても、法蔵菩薩が浄土の構築にかかったわけではありません。ここで仏道の修業、すなわち菩薩を行じたのです。これを法蔵菩薩の「因位の勝行」といいます。これを簡単に申せば、実に永い年数にわたって、無量の徳行を積んだということです。しかも感情や感覚的な対象に溺れたり怒ったり激したりすることを制して、少欲知足に平静な智の成立を計りつつ正しきことに勇往邁進し、何物にも捉われない空な、絶対自由な立場で、六波羅密の菩薩行を自ら行じ、人に教えて行ぜしめたということです。つまり、正しい立場を得る修養につとめ、この修養を土台にして六波羅密の菩薩行をば、無限に近い長期間努力したというのであります。

○

六波羅密は一般に訳して六度といっていますが、これは布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧との六つの行いのことです。

布施とは、知才でも財物でも労力でもおしみなく与えることです。

持戒とは、出家は教団の律制を遵守し、一般人は殺害と盗みと不倫と虚偽と酔いしれて痴ほうになることをいまいめることです。

忍辱とは、感情的に精神を激発しないことです。禪定とは、精神を統一して目的または主張に一体となることです。

智慧とは、以上の五つをなしつつ精神を純化して成立する智で、この智の完全なものが万有を維持統一する真理と一体なる仏智——自在に他を利益し、浄土を成立させ得る仏力の実体となる智——のことです。

以上のように見ると第六の智慧は極めて重大なもので、これを導く他の五つは、心掛けとしても、一般社会道徳上のいましめと見ても当然のことです。しかしながら、六度の行は、法蔵菩薩の如く無限に近い程繰返し、向上につとめてこそ、その真実の実行となり得るものなのです。

たとえば、第一の布施をする場合にも、知才財物労力その他のものを人に施すにしても、それを通じて自身の利害を計ることはもちろん、与えた自分の努力や相手や与えたものについての思いを残してはいけません。他人に与えたことを「おしむ」気持のあつてはいけないことはもちろんですが、自身の貪慾を克服して他へ施した喜びを享受したり、そのことを誇りとすることもないように修養を重ねなくてはならないのです。

このようなことは幾度か行いつつ、その行いの純化を計

るべきものですし、また一つの布施をなすについても忍辱や精進や禪定等の他の行いの支持をかりて純化せねばなりません。

法蔵菩薩は、このような六度の行を、自ら行じ、人を教えて行ぜしめ、人間に想像のできない長い期間にわたって功を積み、徳を累ねられたのであります。法蔵菩薩は、このようにして浄土の設計図である四十八願を實在の浄土に具現しようとして、永い期間を六度の行を修して、ひたすら積功累徳された結果、ついに自在に浄土を現じる仏智力を得るに至ったのです。法蔵菩薩の積功累徳は、次第に効果を現わして、そのいる所もしくは行くところがそのままに、思うままに無量の宝蔵は成立するし、そこにある衆生をして自然に無上正眞の道（菩薩の仏道）に住せしめることができるに至ったということです。法蔵菩薩因位の勝果は、浄土を現ずるために充分な能力であって、菩薩はアミダ仏となる直前と見られるところです。

○

無量寿経はまず、法蔵菩薩が、四十八願を誓願して、世自在王仏の前で改めて、この超世の大願を満足できるまで修行することを誓われることを記すのですが、それにつづいて法蔵菩薩の修行が無限に近い期間に行ぜられて、その

結果、あらゆることに自在なる智慧力を得たことを順序を追って説きます。

そして、そこまで説き終ると局面が一変して、阿難尊者が立ち上って釈尊に、

「法蔵菩薩すでに成仏して滅度を取りたまひとやせむ、未だ成仏したまはずとやせむ、いま現に在しますとやせむ」

と問うのですが、釈尊はこれに答えて、

「法蔵菩薩いま已に成仏して、現に西方に在しませり、こを去ること十萬億那由他の諸佛に値ひて、その仏の世界を安樂といふ。」

その仏は成道よりこのかた凡そ十劫を歴たり」

といわれています。

すなわち法蔵菩薩は、今日よりはるか十劫も昔にアミダ仏となり、その完成された浄土においてになるということなのです。十劫という期間は、法蔵菩薩の修行時代の長い期間に較べるときわめて短い時なのですが、しかし人間の年数として見ると、これも無限に近い昔になります。ですから、私どもとしては、アミダ仏の成仏と西方浄土の成立は永遠の昔で、それが現在につづいているといふべきです。

○

浄土は人間世界の實在性と異った意味の實在であります。世間虚仮、唯仏是真というのが聖徳太子のいましめですが、

私どもは人間世界の方を實在として、仏の世界の方を觀念上の仮想としていますが、實際は逆で、人間的には、觀念上の世界と考えられる仏の世界の方が不動の實在性を持ち、人間的に木や土や肉の物質性ある世界の方が影像的な變化する仮現の存在なのです。

しかし、世間のものに説くためには、世間の實在性に合せて表現せねばなりません。そのため、西方浄土も大地の施設から氣候に至るまで、人間的な仮象を用いて、判り易く七宝莊嚴で、不寒不熱であるなどと記されています。

ですから、これらは人間的の立場の見方でいって、精神的な清浄の土であります。真理が基準となった施設や行為や事業が至上の樂として行ぜられてあるところです。何人も、一たびそこに生きるものは、世間的な邪欲な欲樂が苦惡と見え、悪い考えが苦惱とせられることになり、正しさと、仏道に努力することが無上の歡喜を生ぜしめるところです。必ずしも人間的快樂がある所とは見られません。

さて、法藏菩薩の仏となり給えるアミダ仏は、無量壽、無量光の仏であります。たとえば、この仏の光明は十方の世界の諸仏から無量光、無辺光、歡喜光、智慧光、超日月光等と稱讃されるものであります。

そして、アミダ仏自身についても、浄土についても、さ

らに一般人がその浄土の生活に易々として入ることのできることにについても、法藏菩薩が設計し完成を誓った通り四十八願の全部が成就しているのであります。

○

完成したアミダ仏の浄土は、十方の世界に知られ稱讃される浄土であります。それは法藏菩薩が、そのように誓願して成就した浄土だからであります。しかし、そのような誓願はどんな理由があったのでしょうか。それは十方の世界のものにアミダ仏の名を聞かしめ、浄土の存在を知らしめるためにです。

後で四十八願の解説で判るように、法藏菩薩は聞名の利益を重視して誓願されています。一切大衆の菩提を成ずる場として立てられた浄土は、大衆を利益するために十方世界の人民諸天等によく存在することを知らねばならぬことです。

しかも知られても、たとえ、その知った人が浄土へ生ずることを欲しなくても、アミダ仏の名を聞いただけでも、凡夫は仏道に志し、菩薩はその行を勇気づけられるようにと願いがなされてあったのです。そこで、浄土の成立はまず十方の世界の諸仏菩薩の、アミダ仏の稱讃となって現われてきました。

(以下次号)

会員のたより

とやらになったとかで、その勧誘星で騒いでいます。おかげで、先がでてきました。支部規則があつたからお送り下さい。また支部組織

○本会も創立以来満二十三年目に

今まで世話にもなったことのある

寝ずに家を出たり入ったりしていの心得とか、方法もお教え下さい。

当ります。時代の変化につれて御

婦人なので、熱心にすすめられる

小生のように殆んど寺にいないものには、貴会の御協力を得るのが

尽力下さった方々に深く感謝いた

と一がいに断り切れず、さりとて

なく子供の夢の世界にも、ご浄土一番だと思いました。

します。毎月誌面を拝見している

入団するまでの気持にもなれず困

があつてよいのでないでしょう

と失礼ながら御苦勞のほどがわか

つています。お寺にお詣りの節、

○十一月の皆既月蝕には、欠け始

ります。ついては、かつて中村弁

ご住持に申し上げたところ、「ど

めから復円まで眺めさせられてし

康先生が毎号信仰相談の御回答を

うも困った話」位のところで、余

まった。何しろ子供たちが承知し

下さつて、あの熱心な、思いやり

り役にもたちません。貴誌でも解

吉助)

のある温い御指導を忘れることが

説してありましたが、現に困つて

○小生、寒村の住職です。また村

できません。中村先生の御近況を

いる小生にすぐ役に立ちそうにも

の中学校にも勤務しています。そ

存じませんが、どなたか担当され

ありません。無学の小生如きもの

れでどうやら暮しています。しか

て信仰相談を再開して下さいませ

に間にあるものはないでしょう

し時につけ折にふれ、住職として

んか、これによつて会員と誌面と

か。ご住持が「どうもわが宗門は

これでよいのか反省させられてい

のつながりがほしいのです。今ま

積極的なものがないから」といわ

ます。宗祖七百五十年御忌も段々

で相談欄があれば、愚問を呈した

れましたが、ほんとでしようか、

近ずいて、これも氣になる一つで

いと思うこと再三でした。

貴誌をいつも楽しく読まさせて頂

す。そこで思い出したのが、先代

(清水市、中村)

いていますが、例の婦人の怪腕と

の亡父のやっていた貴会支部のこ

○近所に世話ずきの婦人がいて、

冗舌とは別の世界かも知れませ

とです。昔の箱から当時のものを

頼まれもしないことによく走り廻

ん。

みると、先代は近所の人たちを月

つています。ところがいつやらこ

○人工衛星が打ち上げられて、子

だという気持をもつと育ててやり

の婦人が、例の新興宗教の教師補

供たちは遊びごっこにまで人工衛

催していたらしく、古びた「浄土」

編集後記

○新年あけましてお目出度うございます。今年も旧に倍して御後援下さるようお願いします。

○本誌も第二十四巻を数えることとなり、本号から八頁増頁しました。しかしこの頁数で満足していただけるわけではありません。会員各位の御声援に答へるべく一層の努力をいたす決心でいます。

○会費を一年八十円の増額をさせていただきますました。恐縮ながら前納の分については清算させていただきます。

○真野正順博士から玉稿をいただき、先生の社会に対する消へることのない情熱を感じます。

○表紙の結城天童先生は川端竜子画伯の主宰する青竜社々人です。

引き続き御染筆願う予定です。

○塩田良平博士は、大正大学国文学主任として、日日学生の指導に

当って居られます。今後とも本会のため御後援下さる由です。

○原田三夫先生は、日本宇宙旅行協会理事長として、数年来にわたり宇宙旅行に関する啓蒙運動に打ち込んで居られます。その方面の著作も多くあります。

○池田立基先生の玉稿は六代目菊五郎丈の話ですが、先生と六代目とは、かつて俳優学校の創立者として知られ、特別なご関係にありました。

○高橋良和先生は、童話、人形劇で昔から著名ですが、永い記者生活にあり、現に中外日報代表取締役として多忙を極めて居られます。近著に「童心まんだら」があり、幼稚園児童に関する話を始められました。

○竹中信常先生は、申し上げるまでもなく、よく御承知の先生で、わん君の面白い話をいただきました。次から次に御活躍になっ

てのをみると、お身体はどこにあればだけのエネルギーが蔵されているのか感心します。御自愛下さい。

○聖典講話は、本号から無量寿経講話として佐藤密雄先生にお願いしました。申すまでもなく浄土宗の基礎をなす大切なお経の講話です。各位のご愛読をお待ちしています。

○しばらく休んでいました歌壇を本号から選者に岩野喜久代女史にお願いして開設しました。以前の歌壇を再開するに当り、与謝野晶子先生の高弟たる女史を選者にお願いできて幸せでした。女史は実は従前から本会のために並々ならぬ御教示を下さっていたのです。どしどし御投稿下さい。

○久し振りに信仰相談欄を設けました。担当は最適任者佐藤賢順先生にお願いしました。このことが一部に伝っただけで質問が寄せられました。大小の奇問難問であつ

てもなくても、気にかかることをお質ね下さい。必ずや意に副う回答があると信じます。

「浄土」購読規定

一部定価 金四十円
(送料四円)

会費 金 四八〇円
(送料不要)

浄土 正月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可
昭和三十三年十二月廿五日 印刷
昭和三十三年一月一日 発行

(定価四十円)

編集人 竹中信常
発行人 佐藤密雄
印刷人大 橋 貞 雄

印刷所共同印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人顕仰会

振替東京八二一八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

指導 外語教授 増谷文雄
監修 東大、大正講師
教育 法然さま
まん画

B 五判一〇四頁
定価二二〇円 千二四円
(十部以上二〇〇円 千実費)

者 浄土門主

大正大学長
増上寺法主
知恩院執事長

浄土宗務長

岸 信宏 貌 下

椎尾 弁匡 大僧正

香 月 善 裕 師

渡 辺 真 海 師

この本は絵ときをもつて、わが宗祖、法然上人の御生涯と御教旨を、少年少女に、わかりやすく、かつ親しみやすく描き出したものであります。しかも、その内容は、国宝「勅修御伝」によったものであります。

若い世代の人々のために!!

大正大学教授
竹中 信常 著

宗教心理の研究 A 五判五九〇頁
定価二二〇〇円 千実費

宗教が現代人の心理にどのような受けとられていくかという
ことを、古来の学説史に即して説明すると共に、信仰の心理
霊感の心理、宗感心等とテーマとしてとり上げている。宗教を
理解し、信仰を他に伝へんとする者にとって必読の書である。

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

発行所

青山書院

東京都品川区上大崎一丁目七八二

取扱

法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十三年一月一日発行

浄土

第二十四卷

第一号

定価金四拾圓(送料)

値段改正中 材料値上りの為お値段は下記の一・二割高です

鎖ブランコ 2人乗	Y 13,000
鎖ブランコ 3人乗	Y 15,000
鎖ブランコ 4人乗	Y 22,000
鎖ブランコ 6人乗	Y 26,000
椅子ブランコ 4人掛	Y 13,500
太鼓橋	Y 10,000
ジャングルジム 中型	Y 28,000
単式滑台 中型	Y 23,000
複式滑台 中型	Y 36,500
動物付き遊動木	Y 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達実費(都内横浜 500 円以内
其他1000円以内)組立無料。
小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費当社・送料着払)
組立説明書送付



篠沢鉄工所

東京都大田区堤方町 7 1 8
電(75)1024(池上駅東 3 分)

幼稚園 運動遊具
保育園

全国幼稚園・保育園・小学校・各団体に、良品を廉価にの
ットーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。